

長	野	県		
埋	蔵	文	化	財
セ	ン	タ	ー	
年	報		3	

1986

財団法人

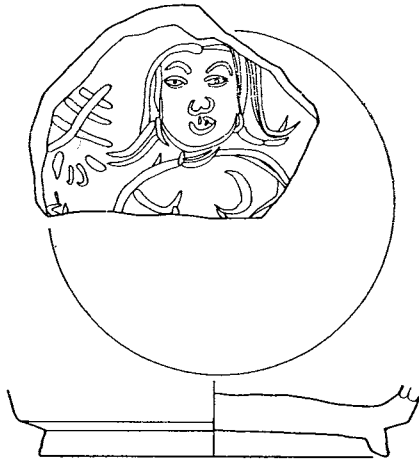
長野県埋蔵文化財センター

長野県埋蔵文化財センター年報3 正誤表

頁	行	誤	正
口絵 4		松本市下 [・] 神遺跡出土	松本市南 [・] 栗遺跡出土
挿図目次	27図	佐久市栗毛坂遺跡北 [・] 西部溝	佐久市栗毛坂遺跡北 [・] 東部
序	2	一つで [・] 節目の年	一つの [・] 節目の年
"	3	インター・チェン [・] ヂ	インター・チェン [・] ジ
1	26	県下では [・] 始めて	県下では [・] 初めて
3	8	(県坂)以南の	(県坂)以北の
"	20	平安京以西	平安京以 [・] 東
14	18	貨 [・] ・神功開寶	寶 [・] ・神功開寶
20	21	建物址の内 [・] には	建物址の中 [・] には
"	33	(小林俊一 [・])	(小林俊一 [・] ・金原 正)
21	18	時期別に [・] 遍遷	時期別に [・] 変遷
22	13	覆土遺物の	覆土への
28	18図	線刻画ある須 [・] 急器杯	線刻画ある須 [・] 恵器杯
35	36	3軒の [・] 堅穴居住址	3軒の [・] 堅穴住 [・] 居址
36	8	寛永通 [・] 寛	寛永通 [・] 寶
37	26	これとは [・] 对象的に	これとは [・] 対照的に
42	21	丹波 博	丹羽 博
"	27 29	森島 稔	森嶋 稔
"	39	関沢 総	関沢 聡
47	16	平村 彰	平林 彰

長野県埋蔵文化財センター年報

1986



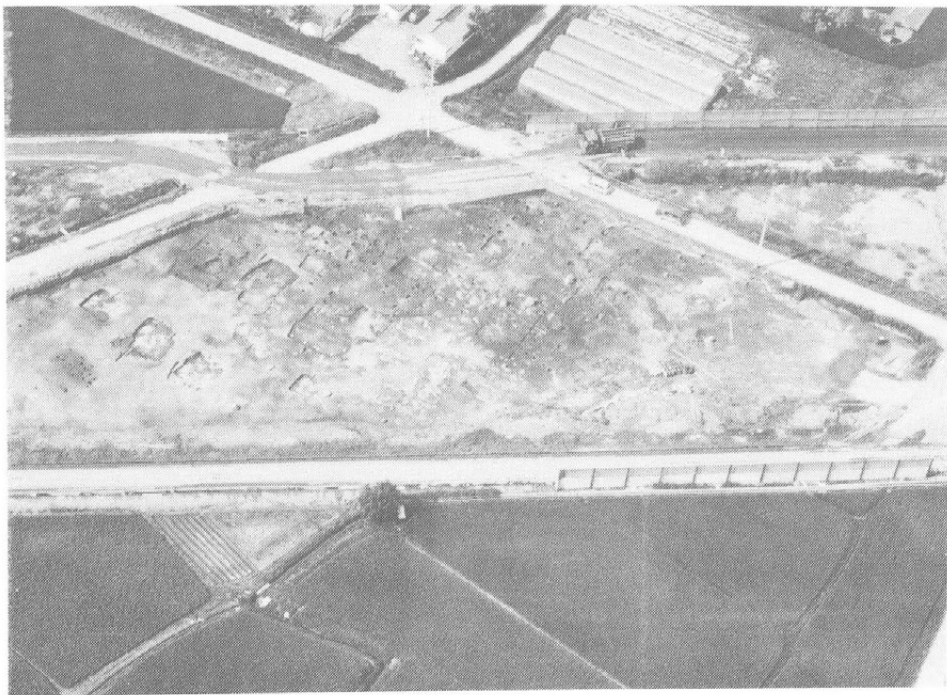
女性像線刻画ある須恵器杯（松本市三の宮遺跡出土）

財団法人

長野県埋蔵文化財センター



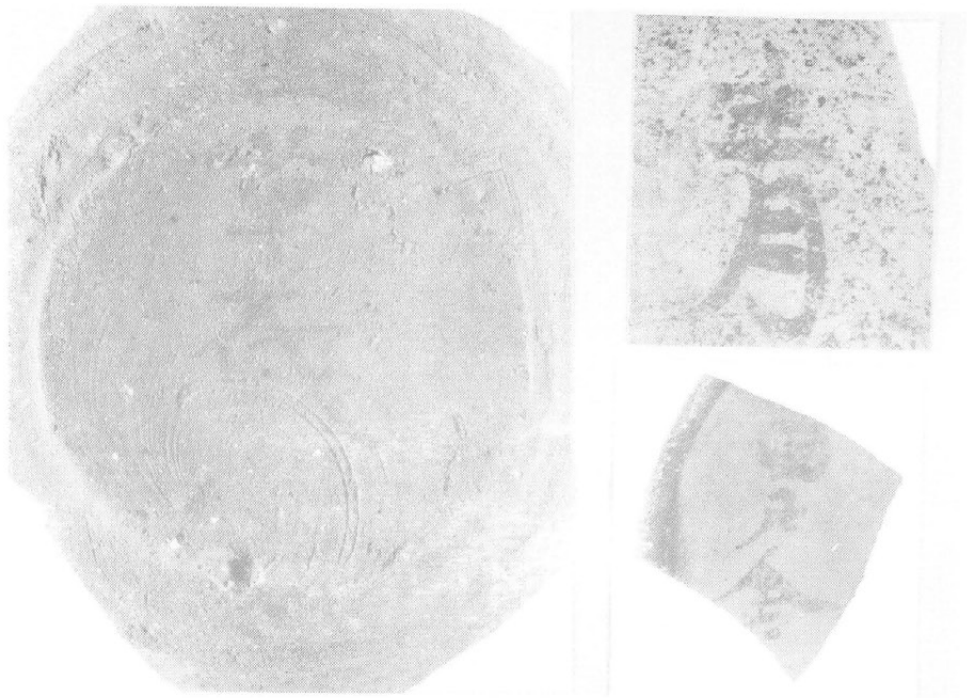
1 松本市下神遺跡中央部(上)・同南栗遺跡中央部(下)全景(東より)



2 松本市北栗遺跡中央部(上)・同三の宮遺跡中央部(下)全景(東より)



3 松本市三の宮遺跡出土女性像線刻画ある須恵器杯(上)と中世陶磁器片(下)



4 松本市下神遺跡出土「美濃国」刻印ある須恵器杯（上）
墨書土器（下）（「草茂」下神遺跡・「青」北方遺跡・「西戸舎□」下神遺跡）

序

本埋蔵文化財センターも、昭和57年度発足以来ここに5年目を迎えました。いろいろな意味で、今年度は一つで節目の年であったといえます。

その第1は、昨60年度以来の大発掘調査事業、特に松本インター・チェンヂまでの遺跡調査を無事完了し、とかく懸念視され、かつ一部にあった「埋蔵文化財邪魔物論」的見方に対し、痛打を浴びせ反省を促すような大きな成果をあげた点にあります。第2には、中央自動車道長野線のみを対象とした本センターの事業も、関越自動車道上越線と関連して、10月からではありませんが、佐久地方での本格的調査に備えた「佐久調査事務所」が開設されたことです。62年度から本格化する佐久市域での発掘調査、更に予想される中央自動車道長野線の北上に備えた「長野調査事務所」の62年度新設など、本センターの事業もいよいよ全県下にネットワークを広げる段階に至ったわけです。また、第3には、こうした埋蔵文化財保護事業の1つの帰結点ともいえる、調査成果の公表という『報告書』刊行事業がはじめて実現できたことです。500余頁の「岡谷市」関係10遺跡の調査成果と課題を盛った内容は、十分活用いただけるものと存じます。今後、塩尻市や松本市など継続して刊行するよう準備中です。

さて、本年度事業の中心課題は、上述したように60年度に引続く松本市域を主とした発掘調査にありました。わけても、松本市神林地区の下神遺跡、それに鎖川を挟んで対峙する島立地区の南栗・北栗・三の宮の三遺跡は、2年間にわたる路線内の全面調査によって、膨大な資料が提示されました。竪穴住居址だけでも合計908軒、掘立柱建物址365棟という数字は、県下は勿論、全国的にも例をみない成果といえます。松本平における古代～中世の歴史究明の原資料としてだけでなく、日本古代・中世史研究に大きな役割を果たすことでしょう。

個々の遺構や遺物にも、貴重な“歴史の証人”が登場して話題を投げました。“平安美人”を髣髴とさせる人物線刻画ある須恵器の破片や、「美濃国」の刻印が明瞭に読みとれる同じ須恵器の破片、また、古文獻に記録された本県にあった庄園名「草茂」を墨書した土師器の破片、官衙など重要な機関から多く出土するという「漆紙文書」片の存在など、ほんとうに小さなものですが、その意味する内容は実に大きく、それぞれが歴史を背負う文化財であることを知らされる貴重な資料も多数発見されました。

こうした発掘調査と同時に、普及・公開活動として、現地での説明会や発掘終了後の展示会なども開催し、多数の方々を参観を頂きました。こうした文化財保護思想の啓発事業は、まだ十分ではありませんが今後も努力をつづけていく所存です。

刊行にあたり、御協力を頂いた関係各位に深謝し、今後の御支援をお願い致します次第です。

昭和62年3月

財団法人長野県埋蔵文化財センター

理事長 村山 正

目 次

口 絵

序

目 次

I 発掘調査及び整理事業の概要

1 中央自動車道長野線関係	1
(1) 発掘調査の概要	1
(2) 整理事業の概要	3
2 関越自動車道上越線関係	4
3 松本盆地沖積地の地質と地形形成過程	8
(1) 地質概要	8
(2) 地形形成過程	10
4 発掘調査遺跡	12
〈中央自動車道長野線関係〉	
(1) 吉田向井遺跡(塩尻市)	12
(2) 下 神遺跡(松本市)	13
(3) 南 栗遺跡(〃)	19
(4) 北 栗遺跡(〃)	21
(5) 三 の 宮遺跡(〃)	27
(6) 北 中遺跡(松本市)	29
(7) 北 方遺跡(〃)	33
(8) 上手木戸遺跡(豊科町)	35
(9) 南 中遺跡(松本市)	36
〈関越自動車道上越線関係〉	
(1) 栗毛坂遺跡(佐久市)	37

II 普及・研究活動の概要

1 現地説明会	39
2 現地見学	39
3 展示会	39
4 研究会・学習会	40
5 刊行物	42

III 機構及び事業の概要

1 機 構	43
(1) 組 織	
(2) 事 務 所	
2 事 業	43
(1) 理事会及び会計監査	
(2) 調査事業	
(3) 事業費	
(4) 普及活動	
(5) 職員研修	
(6) 県内市町村及び団体等の埋蔵文化財関連事業への協力	

昭和61年度役員及び職員	48
--------------	----

口 絵

- 1 松本市下神遺跡中央部全景(上)・松本市南栗遺跡中央部全景(下)(東より)
- 2 松本市北栗遺跡中央部全景(上)・松本市三の宮遺跡中央部全景(下)(東より)
- 3 松本市三の宮遺跡出土女性像線刻画ある須恵器杯(上)・同遺跡出土中世陶磁器片(下)
- 4 松本市南栗遺跡出土「美濃国」刻印ある須恵器杯(上)・墨書土器(下)(「草茂」下神遺跡・「青」北方遺跡・「西戸舎」下神遺跡)

カット

- 中 扉 松本市三の宮遺跡出土女性像線刻画実測図
目 次 関越自動車道上越線にかかる佐久市栗毛坂遺跡での鍍入式風景

挿図目次

第1図	中央自動車道長野線にかかわる松本市・豊科町内遺跡分布図（1：50,000）	6・7
第2図	関越自動車道上越線にかかわる佐久市内遺跡分布図（1：70,000）	6・7
第3図	松本市西部における現在の地形模式図	8
第4図	松本市西部発掘調査地点模式柱状図	8
第5図	中部地区Ⅱ層の粒度分布曲線	9
第6図	国道上高地線以北のⅠ層相当礫層の長径変化	9
第7図	松本市西部の大地形変遷モデル	10
第8図	松本市西部の風景と北にのびる中央道	11
第9図	塩尻市吉田向井遺跡全体図（部分）	12
第10図	松本市下神遺跡の礎石をもつ97号大型竪穴住居址	14
第11図	松本市下神遺跡全体図（折込み）	15・16
第12図	松本市南栗遺跡全体図（折込み）	17・18
第13図	松本市南栗遺跡550号住居址出土土器一括品	20
第14図	松本市北栗遺跡87号住居址遺物出土状態	22
第15図	松本市北栗遺跡全体図（折込み）	23・24
第16図	松本市三の宮遺跡全体図（折込み）	25・26
第17図	松本市三の宮遺跡の礎石のある大型竪穴住居址	28
第18図	松本市三の宮遺跡出土の女性像線刻画ある須恵器杯	28
第19図	松本市北中遺跡の囲い石ある遺構	30
第20図	松本市北中遺跡の石棺状遺構	30
第21図	松本市北中・北方遺跡全体図（折込み）	31・32
第22図	松本市北方遺跡の礎石のある大型竪穴住居址	34
第23図	松本市北方遺跡の想定復元図	34
第24図	南安曇郡豊科町上手木戸遺跡全体図	35
第25図	佐久市栗毛坂遺跡全体図	37
第26図	佐久市栗毛坂遺跡南西部溝全景	38
第27図	佐久市栗毛坂遺跡北西部溝全景	38
第28図	あがたの森文化会館の展示会風景	40
第29図	松本市下神～三の宮遺跡、現地説明会風景	47

第1表	昭和61年度中央自動車道長野線及び関越自動車道上越線関連事業一覧	5
-----	----------------------------------	---



関越自動車道上越線にかかる佐久市栗毛坂遺跡での掘入式風景（61.10.6）

I 発掘調査及び整理作業の概要

昭和61年度は、昨年までの中央自動車道長野線(以下「長野線」とする)を主とする事業に、新たに関越自動車道上越線(以下「上越線」とする)関連事業が一部年度途中に加わった。両者の発掘調査に対し、一方では当センター発足以来はじめての報告書刊行事業(岡谷市分)と、塩尻・松本両市域分の整理作業という部門があり、大きく4つに分けられる。以下、それらの概要を述べることにしたい。

1. 中央自動車道長野線関係 (第1図)

(1) 発掘調査の概要

調査区域 塩尻市・松本市・南安曇郡豊科町(総延長31.5km間)

調査遺跡数 9遺跡(塩尻市1,松本市7,豊科町1) ただし、松本市の南栗・北栗・三の宮の3遺跡と「新村・島立条里遺構」は重複しているので、記述は3遺跡中に含めてある。

調査総面積 126.840㎡

発掘調査期間 昭和61年4月7日～同年12月3日

本年度の発掘調査は、その主体が松本市西郊の水田地帯にあったため、前年度に較べ時代的に古い先土器・縄文・弥生時代等についての成果は、わずかであった。しかし、北栗・南栗遺跡の最下層から出土した少量の縄文中期末～後期の土器は、極端に遺跡が減少するという中部山岳地帯特有の該期の遺跡のあり方に今後一石を投じたものとして特記すべきであろう。また、奈良井川左岸に今まで少なかった弥生時代の遺跡が痕跡的とはいえ、北栗・南栗で確認された点も一つの刺激となり、三の宮地籍での松本市教委による弥生後期集落の発見につながるものとして記録されるべき成果といえよう。

古墳時代以降については、予想どおり前年度に引きつづく調査により更に大きな成果を得たといえる。下神・南栗・北栗・三の宮・北方・北中の松本市内の遺跡のみでも、該期の住居址は計990軒、それに掘立柱建物址380棟を加えると合計「1,370」という数字となり、調査面積が多いということを考慮しても、一市という行政単位でこれだけの集落址を発掘調査したことは、勿論県下では始めてであり、全国的にみても稀少な例といえるであろう。

当然その出土遺物量も膨大で、整理箱にして約3,000箱に及ぶ。遺物の中でも代表的な土器に例をとれば、復元完形土器のうち甕などの大形が約4,000点、杯などの小形のものにいたっては約20,000点という個体数になり、その数量からも調査の状況が如実に示されているといえよう。

これらの成果の詳細については今後の整理作業によって次第に明確になるであろうが、ここでは今後の大きな課題についてのみ触れておきたい。

古墳時代から奈良・平安時代～中・近世にわたる各期とも、それぞれの成果に対する課題もあるが、中でも平安時代を中心とした古代集落構成とその変遷は、すでにその一部のみでも相当問題点を含む観察や成果が判明している。大きな時代ごとによる集落構成内容の特色、更はその時代内の小時期ごとの集落の移動・変遷とその内容の変化な

ど、またこうした居住域の変遷に伴う水田・畠など生産域のあり方、土壌などを中心とした墓域の動向など、集落の全体像の解明に次第に資料が集積されつつある。

一方、遺構個々についても、例えば今回の調査で判明した平安時代の一辺10mに及ぶ「大型住居址」のあり方は全国的にみても類例が少ないし、また古代末～中世に及ぶ土壇（堅穴状遺構）を伴う掘立柱建物址の多出などは共に建築学上からも大いに注目されている。なお、北栗・三の宮両遺跡を含む一帯が、古代条里制の遺構をよく残存する例として郷土史のみならず中央学界で紹介されてきたが、今回の調査により、それが大幅な訂正をよぎなくされる一すなわちこの条里遺構の成立が遡っても古代末、整備された土地制度として本格的に開始されるのが中世以降である点がほぼ確認されたことは、最近の全国の同種遺構に対する究明を続ける歴史地理学界に大きな影響を与えたといっても過言ではないだろう。

次に出土遺物について、二・三触れておきたい。前記したように、塩尻市低地部から松本市西部に展開する水田地帯の各遺跡からは、古墳時代以降中近世に及ぶ土器が多量に出土している。中でも奈良、平安時代のそれは、住居址・掘立柱建物址等の遺構と組み合わせ、格好の土器編年資料として重要な意味をもっている。土師器・須恵器・灰釉陶器を中心に輸入陶磁器も含めたその豊富な土器群は、今後の作業を通じて松本平南部といった限定された一地域のみでなく、欲をいえば県下は勿論、東国における基準資料として学界で狙上りのせられるような内容を付加した編年体系とすべく整理・分析を続けている。一方、単なる土器編年に終わらずに、遺跡、遺構相互における器種内容やその構成の変遷を追い、また胎土分析などを加えての周辺地域との交流究明など、多方面からアプローチし、ミクロに、そして一方ではマクロに総合化された遺物の復元に迫ってみたいと考えている。

個々の遺物のうち、特に注目すべき例を次に紹介しておこう。

女性像線刻画は、松本市三の宮遺跡でも最も遺構の密集した地域にある128号住居址覆土から出土した。須恵器高台杯の内部底面に篋状工具で線刻されている。上半身のみで、下半身を欠くのが惜しまれるが、器形からみて全身像ではなかったろう。同一面に記号か文字らしい線刻もあり、氏名の一種を絵画に並列させたという解釈をとる考えもある。平安時代前半に属するが、その表現が明るくおおらかで、県下は勿論、全国的にも珍しい出土例といえよう。

美濃国刻印ある須恵器。松本市南栗遺跡でも奈良時代の遺構の多い地区にある625号住居址から検出された。立派な石組みカマド以外に何ら特色のない一般の住居である点が面白い。美濃須衛窯産の杯蓋の内面中央に押捺されている。後にもう一例出土したが、県下では飯田市恒川遺跡（こんが）に類例があるのみである。他県の例をみても、郡衙址に想定されている恒川例から考えても、南栗遺跡の性格究明に欠くことのできない資料といえよう。

漆紙文書らしい例も整理過程で判明した。大規模かつ奈良三彩小壺を出土するなど重要な遺跡を裏付ける資料を多出した松本市下神遺跡である。溝に囲まれた前述した大型住居近くの遺物が多量に出土した大きめのピット中から検出されたが、その時点ですでに細片化していたため、整理期間に入って赤外線カメラによる分析を行った結果、文字らしい痕跡が比較的明瞭に残っていることがわかった。しかし、細片のため文字自体の

判読は今後に残されている。類例は先の南栗遺跡中松本市教委調査地点で、土器面に貼りついて出土した紙片があるのみだが、これは漆紙ではないという。漆紙文書の出土例もまた官衙的性格の遺跡に多いとき、下神遺跡のもつ重要性に強力な資料を加えたといえる。

庄園名らしい文字を墨書した須恵器杯が5ヶ、同じく下神遺跡の大型住居付近から出土した。平安前期頃の『多武峯略記』仁和3年4月13日の条に「信濃国筑摩郡蘇我郷字草茂庄云々…」の記事があり、古くから蘇我=崇賀=宗賀をもとに、一志茂樹博士らは木曾との境にある鳥居峠(県坂)以南の奈良井川流域や一部田川流域を含めた現塩尻市洗馬や宗賀(平出遺跡あり)付近を比定していた。実は下神遺跡は奈良井川のもっと下流であり、むしろ「大井郷」に比定された地域内に入る。ただ地元研究者の中には、下神遺跡のすぐ北を流れる鎖川までを「蘇我郷」と想定している倉科明正氏の意見もあり、今後、文献史学側との意見交換も必要であろう。ちなみに、先の「大井」という刻書土器が同じころ、更に北にあるかつての「高家郷」比定地域内の北方遺跡(松本市教委調査分)から出土している点も興味深い。

墨書土器といえば相当量出土しているが、中でも昨年緑釉陶器7点を一括副葬した土壇墓の発見で有名になった塩尻市吉田川西遺跡の「縣」をあげてよいであろう。「寺」など墨書土器の多い144号住居址から出土した。時期は平安中期の黒色土器杯の外面に大きく書かれている。この他「西戸舎□」「秋」[;||]など種類は多い。

この吉田川西遺跡はその後の整理過程の中でも興味ある事実がいくつか判明してきている。例えば、九州歴史資料館の森田勉氏などは、輸入陶磁器の在り方は、平安京以西においては最高の種類と内容をもつ遺跡とその特異例を指摘されているし、一方、現在まで約350点に及ぶ鏃、刀子、鎌を主とした鉄製品が出土し、その豊富さは単なる集落遺跡としての範囲をこえた意味付が必要とされてきているなど課題も多い。(樋口昇一)

(2) 整理作業の概要

整理を区分すれば、発掘調査記録の整理、遺物の記録化(保存処理を含む)、発掘調査報告書の刊行、諸記録や遺物の収納・保管という四つの段階を踏むことになる。このうち発掘調査記録の整備は発掘調査担当者(班)を主体として実施し、それ以降は整理作業担当者(班)を主体として実施する体制がとられた。後者は、刊行される報告書単位に作業を分担し、保存処理は別に担当者を置いた。本年度以降刊行される報告書は、岡谷市関係諸遺跡(岡谷市内)、吉田川西遺跡を除く塩尻市諸遺跡(塩尻市内その1)、吉田川西遺跡(同その2)の3冊にまとめられるが、松本市関係諸遺跡についてはどういう体制とするか検討中である。従って整理作業は、岡谷市内、塩尻市その1、塩尻市その2、松本市内、保存処理の5者に区分して実施された。年度当初はいずれも担当調査研究員は1名ずつが充てられた。

① 岡谷市内の整理

岡谷市内の整理作業は昨年度から本格的に着手されており、遺物の記録化が進められ、原稿の一部も執筆済みであった。それを引き継ぎ、松本市諸遺跡の発掘調査終了のめどが立った8月以降、逐次担当調査研究員を増員し、最大10人が業務に当たった。発掘調査報告書は62年3月末に刊行されたが、縄文時代草創期

(槍先形尖頭器や隆起線文土器の時期)、同早期(押型文土器及び条痕文土器の時期)、同前期末～中期初頭、同晩期末～弥生時代中期初頭、奈良・平安時代(墳墓)については特に検討を加え、それぞれの遺跡の評価ができるよう努力した。

② 塩尻市内の整理

塩尻市その1の整理作業は、発掘記録の整備以外は未着手で、遺物の記録化から開始された。これまた8月から逐次担当調査研究員を増員し最大12名が業務に当たった。図版作成と一部の原稿執筆までを本年度で実施し、発掘調査報告書は来年度刊行の予定である。報告書には、縄文時代早期(押型文土器及び条痕文土器の時期)、同中期後半、同後期中葉、縄文時代石器全般、弥生時代後期末～古墳時代前期初頭、古墳時代の祭祀遺構等について、特に検討を加えるべく準備している。

塩尻市その2の整理作業は、発掘記録の整備を完了させ、遺物の記録化に着手した。11月から担当調査研究員を増員して最大3名が業務に当たったが、吉田川西遺跡の遺物は、質・量ともに豊かなだけに、記録作業は次年度も継続することとなった。

③ 松本市・豊科町内の整理

この部分の整理作業は、関係遺跡の大半が本年度も継続して発掘調査が実施されており、その終了以前には昨年度出土遺物の一部の記録を行うにとどめた。本年度の発掘調査が終了した遺跡から、順次発掘記録の整備にかかり、引き続いて遺物の記録化に着手した。担当調査研究員はほぼ全員に近い。本格的な整理作業計画は次年度に立案され、実施されることになろう。

④ その他

保存処理に関しては、岡谷・塩尻両市内出土の金属器の脱水・脱塩処理と鋳落とし、有機質遺物の処理等を実施したほか、発掘時の脆弱遺物や有機質遺物の取り上げにも当たった。遺物取り上げ技術や応急保存処理技術は大幅に向上し、資料を良好な状態で保管できるようになった。

(百瀬長秀)

2. 関越自動車道上越線関係 (第2図)

上越線に関連する埋蔵文化財の発掘調査は、本年度が初年度である。昭和61年10月1日に佐久市岩村田に「佐久調査事務所」を新設し、庶務部2名、調査部5名で発足した。直ちに同年10月6日よりインター部分にかかる佐久市岩村田地区栗毛坂遺跡から発掘調査を開始し、約9,000㎡の調査を終了した。その概要は本文(37頁)のとおりである。

なお、ここでは発掘調査が本格化する昭和62年度以降についてその概要を記しておきたい。現在路線が決定している県境-佐久インターチェンジ間、11.9kmにある埋蔵文化財包蔵地は23ヶ所、調査対象面積はおよそ246,000㎡にのぼる。岩村田・平根地区内の平地では弥生時代から平安時代の集落址、平根地区の平尾富士山麓には古墳群が、県境に近づく香坂谷の山麓には、縄文時代から平安時代の各種小規模集落址の存在が予想されている。いずれも今までに学術的な発掘調査がほとんど行われていない地域であり、今後の発掘調査が期待される。

(丸山敏一郎)

(1) 発掘作業

市町村	遺跡名	発掘調査面積		積 m ²	発掘調査期間	調査日数	作業員数	発掘調査の状況 (60・61年度調査の合計)	備考
		60年度発掘調査	61年度発掘調査						
塩尻市	1 吉田向井	5,660	5,160	500	4.10～4.24 11.5～11.13	16	79	縄文一住居址2、平安～中世一住居址15、掘立2、土塚213 外	
	小計	5,660	5,160	500		16	79		
松本市	1 下神	39,400	25,425	13,975	4.7～7.31	88	3,212	奈良～平安一住居址144、掘立50、土塚90、棚列、畑址 外 平安～中世一住居址386、外 豊原遺跡、築城式遺構	
	2 南栗	35,390	13,240	20,100	4.7～11.25	142	7,510	古墳約12基、大田山遺構、中世一住居址251、掘立96、土塚約12基、外 平安～中世一住居址1,906	
	3 北栗	54,320	14,130	38,140	4.7～10.2	121	8,592	平安～中世一住居址16、掘立61、土塚約28、外 平安～中世一住居址16、掘立61、土塚約28、外	
	4 三の宮	43,120	26,800	16,320	4.7～10.27	143	6,112	土塚約2,900、水田址外、縁石圍	
	6 南中	13,800	11,500	2,300	6.4～6.5	2	0	遺構なし	
豊科町	7 北中	12,760	0	11,865	9.11～12.3	58	900	中世～近世一掘立1、竪穴状遺構6、七塚170、水田址 外	
	8 北方	21,640	0	21,640	7.7～11.21	96	2,964	平安～中世一住居址32、掘立10、竪穴状遺構6、土塚626、水田址 外	
	小計	220,430	91,095	124,340		650	29,290	中世～近世 掘立1、竪穴状遺構3、土塚240、畑址 外	
合計		229,290	97,455	126,840		694	29,544		

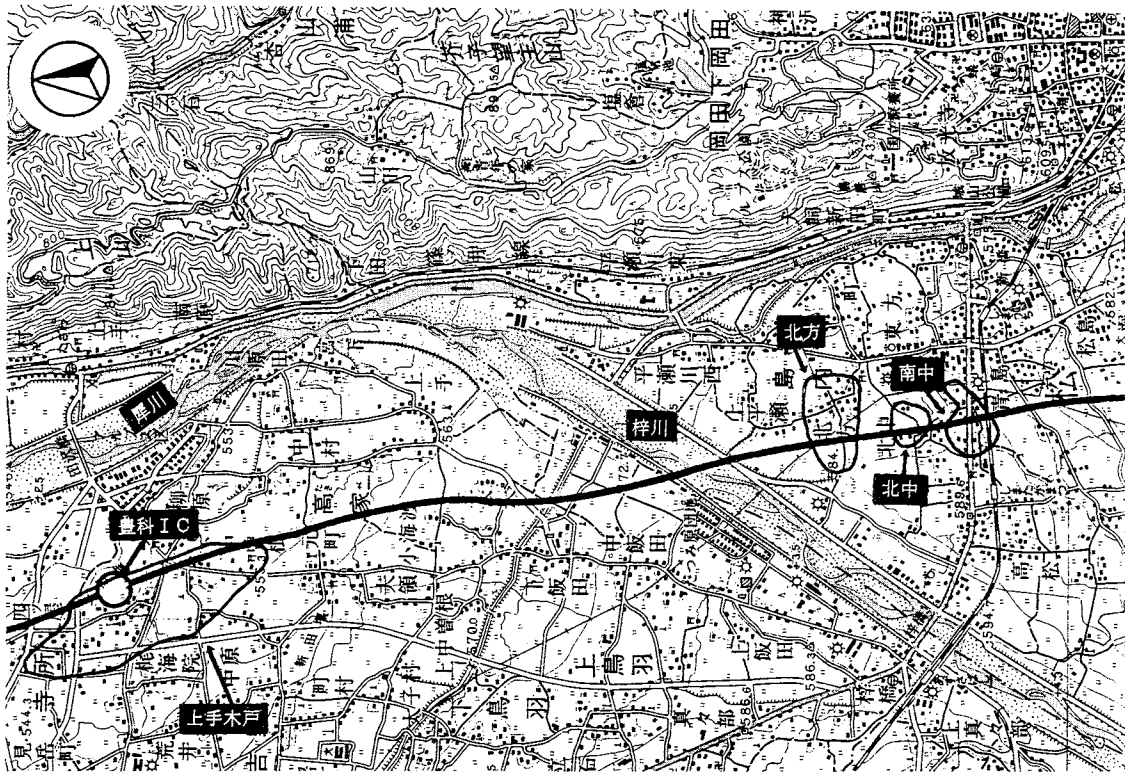
(2) 整理作業

地区名	遺跡名	発掘調査面積	整理作業の状況	作業員数
1 岡谷市	大久保B、下り林、西林、膳棚B、柳畑途、大洞、中島A、中島B	48,930	62.3.31 報告書刊行	7,656名
2 塩尻市その1	青木沢、青木沢東、八雲、大原、北山、御堂垣外、栗木沢、ヨケ、樋口、高山城跡、竜神、竜神平、山の神、中原、犬原、上木戸、千本原、高田、吉田向井	127,254	諸記録の整理 (実測図・写真) 遺物の整理 (洗浄・注記・実測) 諸記録の整理、遺物の整理 (洗浄・注記) (継続中)	
3 塩尻市その2	吉田川西	25,100	諸記録の整理 (洗浄・注記) (継続中)	
4 松本市	神戸、上二子、中二子	59,200	諸記録の整理＝実測図の点検・加筆 (継続中) 遺物の整理 (洗浄・注記)	

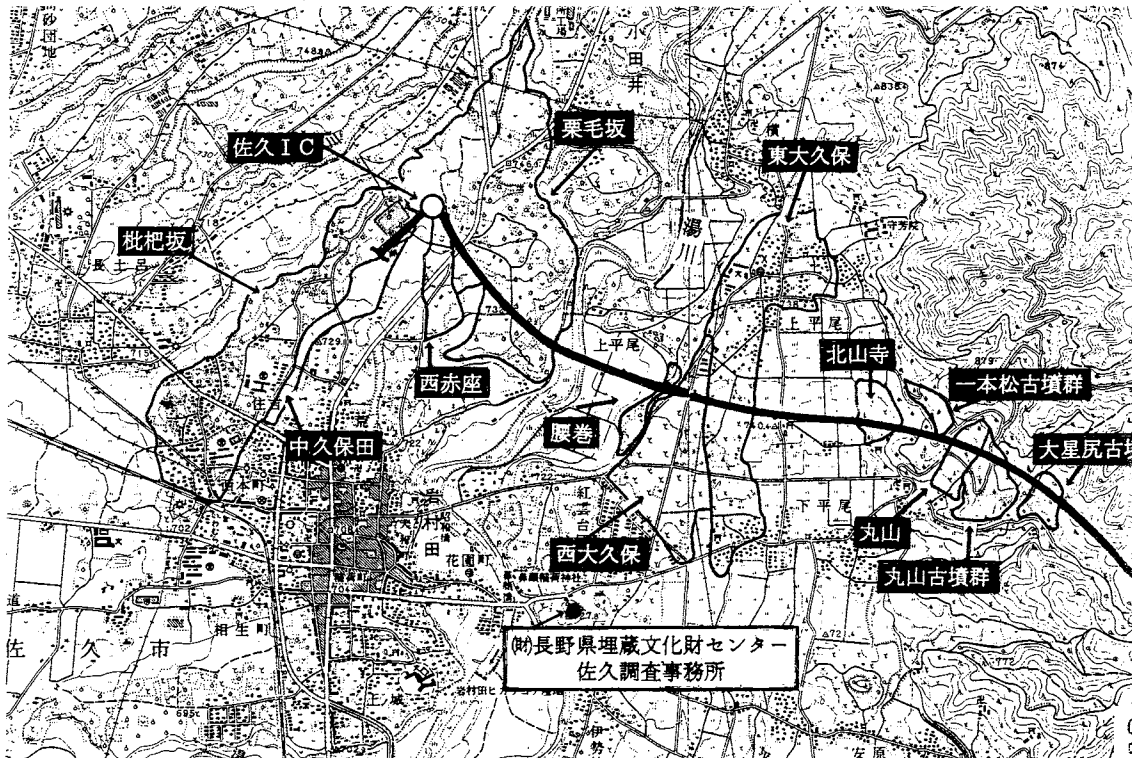
(3) 関越自動車道上越線関係

遺跡名	発掘調査面積		積 m ²	発掘調査期間	調査日数	作業員数	発掘調査の状況	備考
	61年度発掘調査	62年度発掘調査						
1 栗毛坂(群)	78,500	8,956	69,544	10.6～12.26 3.9～3.23	60	1,507	平安一住居址5、平安～近世一掘立8、土塚39、溝30	
合計	78,500	8,956	69,544		60	1,507		

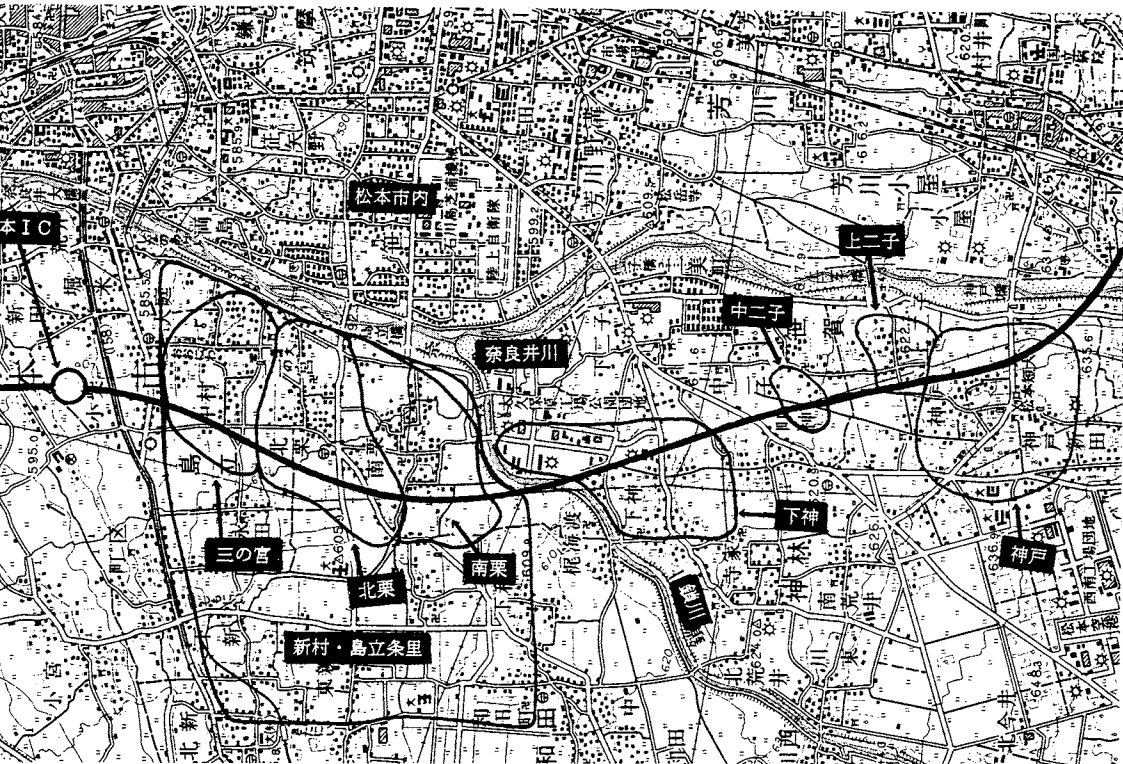
第1表 昭和61年度 中央自動車道長野線及び関越自動車道上越線関連事業一覧



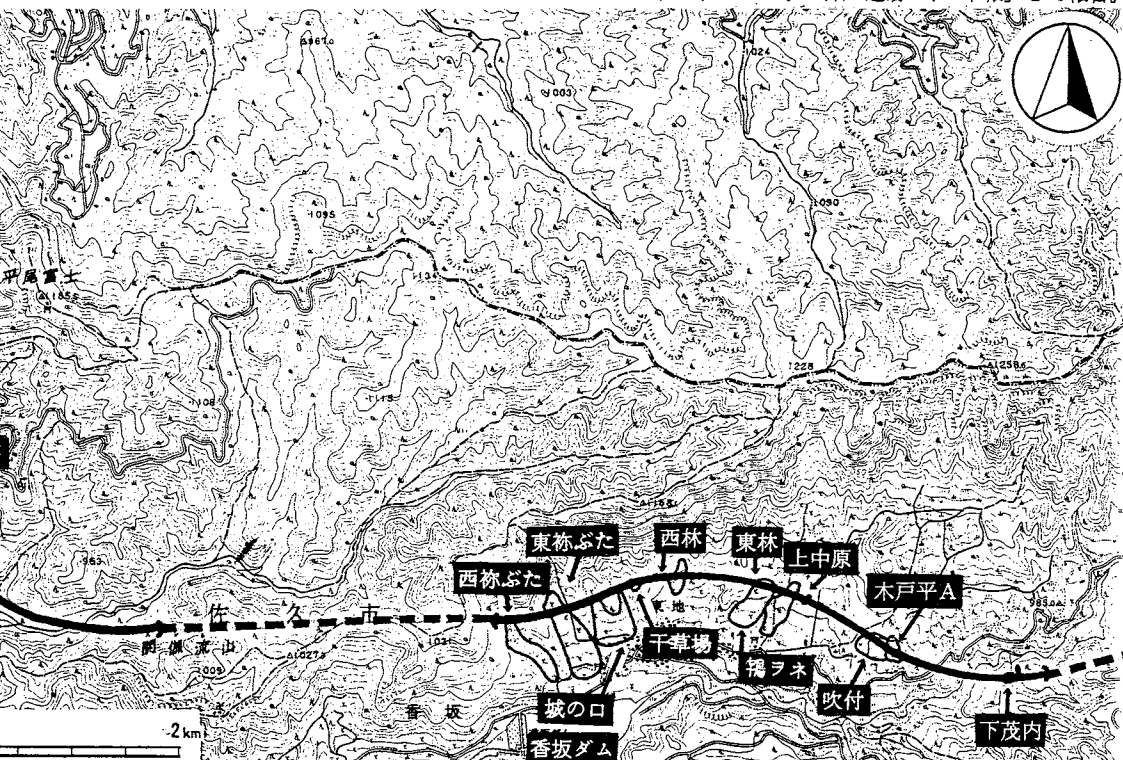
第1図 中央自動車道長野線にかかわる松本市・豊科町内遺跡分布図 (1 : 50,000)



第2図 関越自動車道上越線にかかわる佐久市内遺跡分布図 (1 : 70,000)



中二子・上二子・神戸遺跡は、「年報」2で報告。



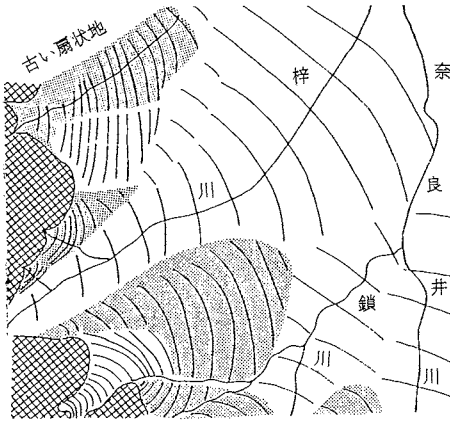
3. 松本盆地沖積地の地質と地形形成過程 (第3図～第7図)

松本盆地を縦断する中央道長野線に係わる遺跡に見られる土層について、全体を大枠で対比することができたのでその概要を以下に報告する。

(1) 地質概要

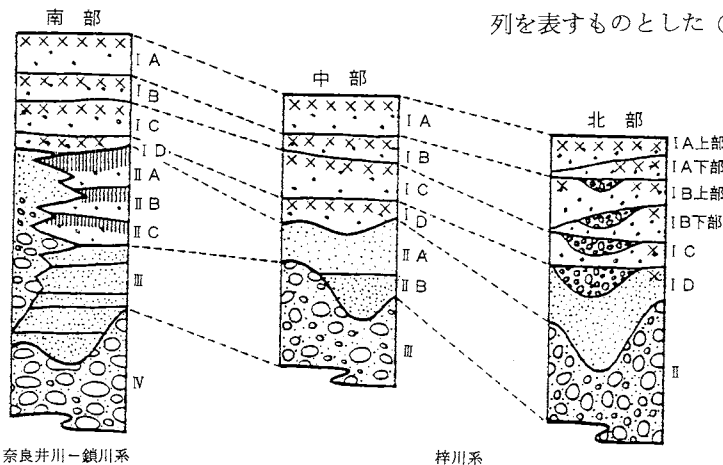
松本盆地は縁辺を更新統の扇状地が取り巻き、これらは相互に接して合流(複合)扇状地を形成している。中央道長野線は塩尻市分まで周辺山地・合流扇状地を通過し、松本市分に入っていわゆる“氾濫原”または沖積地として一括されている一帯を北上する。合流扇状地は完新世に入って奈良井川・鎖川・梓川などの比較的大型の河川によって開析され、下方に侵食基準面に近い緩傾斜の扇状地が新たに形成された。これらの集合体が氾濫原と呼ばれている(第3図)。

盆地低位の合流扇状地堆積物(氾濫原堆積物)は主として上記の河川によって運搬された。層相は水平的にも垂直的にも変化が著しいが、地区・堆積状況によってグルーピングできる。



第3図 松本平西部における現在の地形模式図(『松本平地盤図図幅』に加筆)

層序区分 一般的に層序を組み立てるに当たって、鍵層の存在が有効な手掛かりとなるが本地域では特定できない。そこで、河川の堆積状況を基本に層相対比を行い、層相対比が不能な地区では年代対比を行った。従って、今まで発掘の際に行って来た上位の単層から順次ナンバーリングする命名法はとらず、堆積状況を等しくするものをまとめて累層扱いとし、より下位の序列に当たる土層は部層扱いとし一括土層のメンバーとして細分した。また、同一河川の堆積物を取りまとめて「系」とし、最上位の序列を表すものとした(第4図)。



奈良井川-鎖川系

梓川系

第4図 松本平西部発掘調査地点模式柱状図

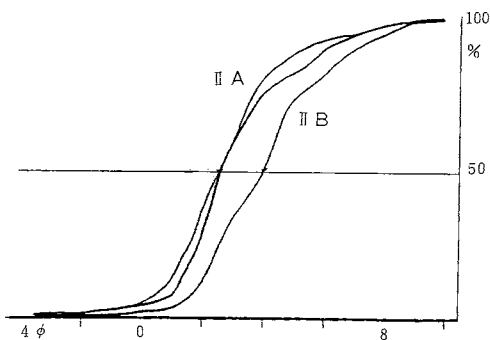
(×印は水田土壌、縦線は腐植土壌)

南部地区 神戸・上二子・中二子・下神・南栗・北栗の各遺跡を含む。奈良井川-鎖川系に属し、4累層で構成される。

IV層は河川堆積の大～巨礫から成り、各所に礫堆を形成する。III層は河川堆積の細砂から成り、鎖川系の礫層と指交する。II層は

3部層の氾濫堆積物から成る。中央道長野線が自然堤防上を通過するため、各遺跡では砂質泥層が観察される。また、しばしば鎖川系の砂層または砂質礫層が挟在する。

I層は鎖川系の4部層の泥流性堆積物から成る。特に最下位のID層はII層上面の凹地を中心に小分布し、堆積時期を違える数単位の単層で構成される。なお、一般にI層の各部層の上限は水田土壌化しており、II層の各部層の上限は腐植している。



第5図 中部地区II層の粒度分布曲線

堆積時期はIII層が縄文中期以前、II層が縄文中期～弥生中期、I層が古墳時代～近世と考えられる。

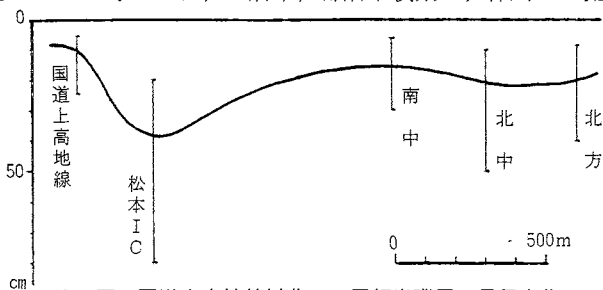
中部地区 北栗・三の宮の各遺跡を含む。梓川系に属し、3累層で構成される。

III層は河川堆積の大礫から成る礫層で、東西方向の帯状の礫堆が横に幾重にも連なり、波状の地形を形成する。全体に北へ緩く傾斜し、南縁の県道高綱線付近(北栗遺跡中央部)の礫堆は最も高く、鎖川系と梓川系とを画する役割を果たして来たと考えられる。II層は河川堆積の砂層から成り、2部層に区別される。下位のII B層は細砂～シルトに、上位のII A層は中～粗砂にまとまりを見せる(第5図)。II層はIII層上面の凹面に発達するが、特にII B層は礫層がかなり深い地点でないと観察されない。I層は4部層の泥流堆積物から成る。南部地区と同様に、最下位のID層はII層上面の凹面を中心に小分布し、数単位を確認できる。なお、I層の各部層の上限は水田土壌化している。

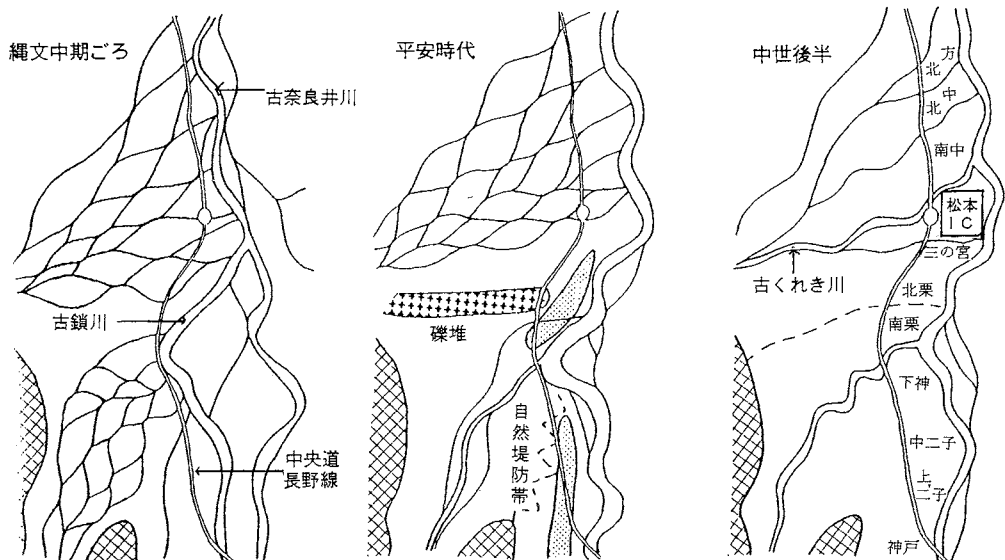
堆積時期はII層が古墳時代以前、I層が平安時代中頃～近世と考えられる。

北部地区 三の宮・南中・北中・上手木戸遺跡を含む。梓川系に属し、2累層で構成される。

II層は河川堆積の大礫から成る礫層で、各所に礫堆を形成する。I層は6部層の主として泥流堆積物から成る。最上位の部層はほぼ全面をシート状に覆うが、下部部層に至るに従って分布面積を小さくし島状に分布するようになる。これら島状分布域の間は河川堆積の礫層が発達するが、国道上高地線から南中遺跡付近にかけては礫層が幅広く分布する(第6図)。また、礫径も松本インターチェンジ北側で最大であり、現梓川付近に見られるようなものより数段大きい。従って、これらの大量の巨礫を掃流物質として運搬するための流速は著しく大きかったと考えられ、I層中部層堆積期に、梓川の主流がこの付近を流れていたと推測できる。なお、最下位のID層は河川堆積であるが、離水期が中部地区のID上面期とはほぼ一致するため、両層を対比し、I層のグループに含めた。



第6図 国道上高地線以北のI層相当礫層の長径変化



第7図 松本市西部の大地形変遷モデル（破線は鎮川系の東縁および北縁）

I D層の離水期は平安時代後半，I C層以上の堆積期は平安時代末期～近世と考えられる。

(2) 地形形成過程（第7図）

縄文中頃まで 各地区とも最下位層が大～巨礫層であることで共通する。それぞれが各所に礫堆を形成し，上面に激しい凹凸があることから，後氷期初めの増温期には各河川が大量の水を背景に網状流を成していたものと思われる。しかし，当初からあまり大きな傾斜を持たなかった奈良井川は，最も早く縦断面形が平衡曲線に近付き，最適期（縄文前期～中期）に入る頃には砂泥掃流河川となり，河道も単一化の兆しが見え始めていたと思われる。

最適期は堆積状況からすると，比較的平穏であったと推定される。奈良井川系地域は静かに砂泥を堆積しており，鎮川系や梓川系地域は水位が低下して中州や礫の小丘が点存していたと思われる。

縄文中期末～古墳時代 再び堆積作用が活発な時期を迎え，奈良井川に沿った一帯に自然堤防が形成され始めた。この時期，奈良井川の河道はほぼ単一化して側刻を繰り返す，大きく曲流しながら細粒の泥を運搬していた。この結果，弥生中期頃には確たる自然堤防が出現していたと思われる。

梓川系の一帯では河川域が北側へ移動し，流れが去った後には平行に走る帯状の礫堆と，その間の低部を砂層に埋められたほぼ平坦な地形が残された。そして，遅くとも古墳時代末期頃にはこの一帯が安定していたと思われる。しかし，三の宮遺跡北部以北は相変わらず河川域にあり網状流が自由に流れていた。

鎮川は河道が単一化する傾向にあったが，東は奈良井川の自然堤防に，北は梓川の礫堆に出口を閉塞され，増水期には掃流物質を周囲に撒き散らす条件が十分備わっていたものと思われる。

奈良・平安時代 堆積作用が極めて緩慢な期間で、古墳時代までに形成された大地形がそのまま継続していたと考えられる。鎖川は時折小規模な氾濫を繰り返し、自然堤防帯の低地に堆積物を供給した。平安時代後半には河川の水位が下がり、梓川が国道上高地線付近に集中する傾向にあり、その北方はいくつかの安定した中州が現れていた。

本地域の遺跡はこの期間に営まれたものが大勢を占める。

中世～近世 泥流が広い範囲を覆う時期であり、この結果盆地低位の合流扇状地形が形成された。泥流堆積層は5単位が確認されているが、子細に観察すれば更に数単位が区分されるだろう。これらの泥流は中世後半の小安定期を挟み、前後に分かれて堆積している。構成物質の特徴から鎖川系・梓川系であり、奈良井川には既に泥流を供給するだけの傾斜が失われていたと考えられる。いずれにせよ泥流による埋積—平坦化により、鎖川系は奈良井川の自然堤防帯を覆いつくし、梓川系は河道を単一化に導いた。この過程の中で、中世末頃に何等かの原因で梓川の主流がほぼ現在の位置に移動している。

以上、盆地低位の沖積層の地質とそこから類推される地形形成過程を考察してきた。最終氷期終了時から現在まで盆地は連綿として埋められ続け、今後もおそらく主要な河川が平衡河川に移行するまで続くと思われるが、この間、縄文中期頃、奈良・平安時代、中世後半に堆積作用が広域に中絶する時期があることが推察された。特に平安時代は長野線のほぼ全線にわたって遺構が展開しており、堆積作用の中絶時期との関連が興味深い。

(小口 徹)



第8図 松本市西部の風景と北にのびる中央道（島立地区南栗遺跡付近上空から）

4. 発掘調査遺跡

中央自動車道長野線

(1) 吉田向井遺跡

—第9図—

所在地：塩尻市大字広丘字行人塚2,806他

調査期間：昭和61年4月10日～同年4月24日，同年11月5日～13日

調査面積：500㎡（総計 5660㎡）

立地：田川と小田川にはさまれた段丘性の微高地

時代と時期：平安時代，中世

遺跡の特徴：平安時代の集落，中世の墓域

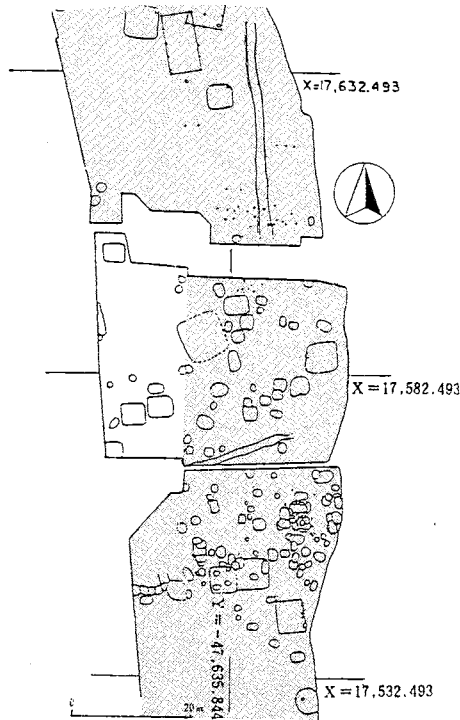
主な検出遺構

遺構 時期	竪穴 住居址	掘立 建物址	土 壙	溝	櫓 列	火 葬 墓	そ の 他
縄 文	(2)		(1)				
古 墳			(1)				
平 安	6(15)	(2)	2(52)	(2)			
中 世			1(27)				
不 明			8(132)				ビット10(148)

() 総計

主な出土遺物

土器・陶器：土師器，須恵器，灰釉陶器，緑釉陶器，内耳土器



前年度より継続した2年次目の調査であり，本年度は調査域中央西側の宅地残件部分の調査を行った。ここは，平安時代後半の居住域と中世土壙群の分布が重なる部分にあたり，今回は前年度検出された縄文時代遺構はなかった。

短期間であったが検出した竪穴住居址は6軒，すべてが平安時代後期で，前年調査した該期9軒よりは，出土土器からみてやや後出的な様相を示している。このうち，45号住居址は北西隅に集石があり，その底部から杯内面に結線で囲んだ中に文字を配する墨書土師器杯2点が出土し注目される。呪術的用法の遺物であろう。中世の土壙からは，人頭大の礫と内耳土器を検出したが，前年も類例があり，その性格が興味深い。

隣接地を調査した塩尻市分の成果と共に，松本平古代～中世の集落を考える上で重要な位置を占める遺跡の1つとってよいであろう。

第9図 塩尻市吉田向井遺跡全体図（部分）（約1：1200）

（小平和夫）

（アミ部分は60年度調査以下各遺跡とも同じ）

(2) ^{しもかん}下神遺跡

—第10図・11図—

所在地：松本市大字神林字大畑3,876番地

調査期間：昭和61年4月7日～同年7月31日

調査面積：13,975㎡（総計 39,400㎡）

立地：鎖川扇状地扇端部

時代と時期：縄文時代中期・後期，弥生時代波及期，奈良時代，平安時代

遺跡の特徴：平安時代の集落

主な遺構

主な出土遺物

遺構 時期	竪穴 住居址	掘立柱 建物址	土 壇	溝	柵列	その他
古 墳						
奈 良	2(6)					
平 安	55 (138)	20 (50)	22 (90)	38 (90)	1(5)	
近 世						墓址1(1)

土器・陶器：縄文中期・後期土器，打製石斧，弥生土器，土師器，黒色土器，須恵器，灰釉陶器，緑釉陶器

鉄 製 品：刀子，鋤先，釘，苧引金等

そ の 他：青銅製銚帯，円面硯，墨書土器，漆紙文書

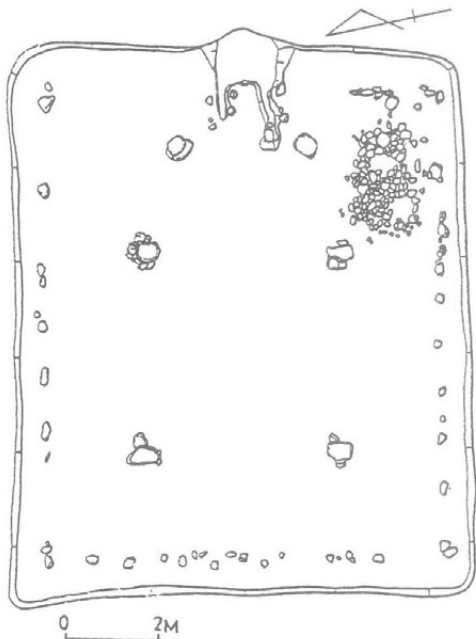
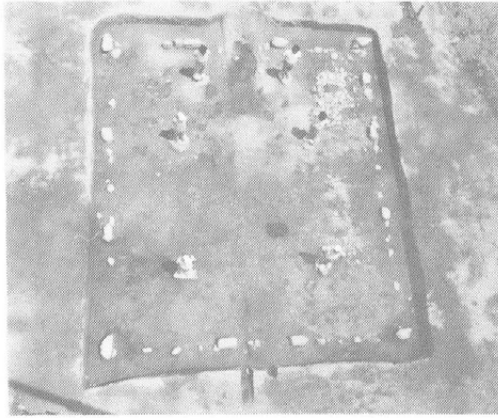
() 総計

はじめに 昭和60年度より継続して行われた調査の2年次目であり，本年度で用地内の調査は終了した。60年度に中央道長野線本線部分と工事用道路分については，調査が終了していたので，本年は南・中・北の三地区にわかれた本線の残り部分が対象となった。今回調査を行った中央道用地の両側は，昭和58年松本市教育委員会によって発掘調査が行われており，20,000㎡の調査区から79軒の竪穴住居址と35棟の掘立柱建物址等が検出されている。今回の調査分を合わせれば竪穴住居址223軒，掘立柱建物址85棟，その他多数の溝・柵列等を調査し，奈良時代から平安時代にかけての集落址の中央部分約60,000㎡を露呈させたことになる。以下，時代別に調査の概要をまとめてみたい。

古墳時代以前 縄文時代中期・後期の土器片，打製石斧，石鏃などが少数検出されたが生活域とは積極的に認め難い。弥生時代波及期の土器が1個体分集中して南部地区から出土している。古墳時代は遺構・遺物ともまったく検出されなかった。

奈良時代 後半に至って集落が営まれるようになる。調査区北寄りの自然流路沿いのやや高まった部分に，まとまりをもって存在する6軒の竪穴住居址が該期に属すると考えられる。この時期の竪穴住居のほとんどは，四支柱を備え周溝を巡らしている。松本市教育委員会調査域内にも該期の竪穴住居址が検出されているがその数は多くない。

平安時代 奈良時代に小規模に成立した集落は，平安時代の初め爆発的な拡大を見せ，調査域全体に展開する。拡大した集落は短かい期間の継続はみせるが，平安時代の中頃までには一斉に姿を消してしまう。松本市教育委員会の調査域でも同様の知見が得られている。この平安時代前半の竪穴住居址は，大形で四支柱穴をもつものとやや小形で柱穴をもたないものの二者の差が現れてくる。さらに集落消滅の直前には，平面規模115㎡で支柱4本とカマ



第10図 松本市下神遺跡の礎石をもつ97号大型堅穴住居址

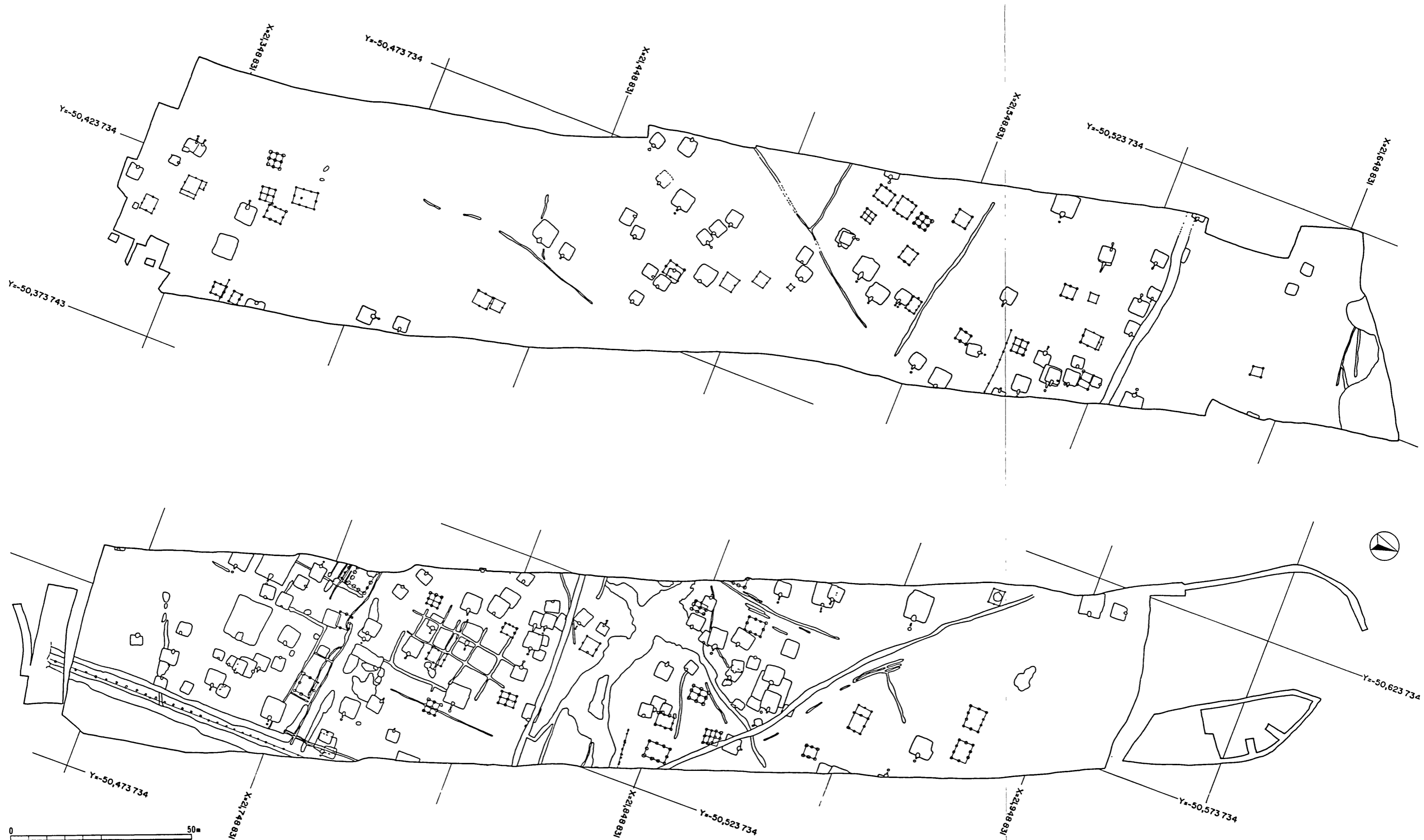
た。奈良時代後半小規模に開発が始まり、平安時代に入って大規模に拡大した集落は、短期間で終焉を迎える。この下神の集落の変遷がどのような歴史的な背景を反映しているのか。堅穴住居址や掘立柱建物址の個々の構造や機能のとらえ方、また「群」としてのまとまり、集落の区画を表していると思われる溝や柵列などとの有機的な関連等遺構の検討、陶硯や漆紙文書・墨書土器などの文字関係資料や銭貨、銚帯、更に松本市教育委員会調査域で検出された、奈良三彩や佐波理鉢などの遺物のあり方等総合的な検討が今後に残されている。(小平和夫)

ド脇柱2本、壁際に等間隔の礎石を据えた堅穴住居址(第10図)が出現し、他の堅穴住居址は小型化してしまうという状況が看取される。

掘立柱建物址はその多くがこの時期に所属すると考えられるが、堅穴住居址との関係、機能・構造等未だに分析は不十分である。また、この集落が、溝や自然流路、空闲地等によっていくつか区切られているように見えることも、集落の構造を考える上で重要である。特に調査区の中央やや北寄りの一画は、南北方向に並行してのびる2条の溝と柵によって区画されており、溝によって囲まれた内部に先述した礎石をもつ大型堅穴住居址や、廂をもつ大形の掘立柱建物址が存在している。遺物の面でもこの一画の溝や堅穴や土塋等からは、円面硯四面、漆紙文書、「草茂」をはじめとする多数の墨書土器、銭貨(萬年通貨・神功開寶)等が出土しており、集落の性格を物語る資料といえよう。

近世 南部の調査区で、15×6mの約90㎡にわたって畝址と考えられる畝の連続を検出した。畝の中から拳骨茶碗、火打ち金、銭貨等が出土した。

まとめと今後の課題 2年次にわたる調査の結果、本遺跡が奈良時代から平安時代にかけての県内有数の大集落であることが判明し



第11図 松本市下神遺跡全体図 (1:1,000)



第12図 松本市南栗遺跡全体図 (1:1,000)

所在地：松本市大字島立字西浦4935他

調査期間：昭和61年4月7日～同年10月9日，11月15日～11月25日

調査面積：20,100㎡（総計 35,390㎡）

遺跡の立地：鎖川と奈良井川の合流地点に近い奈良井川左岸の自然堤防上

時代と時期：縄文時代中・後期，古墳時代，奈良時代，平安時代，中世

遺跡の特徴：古墳時代から平安時代の集落

主な検出遺構

() 総計

遺構 時期	竪穴 住居址	掘立柱 建物址	土 塙	溝	柵 列	焼土址
縄文						11(11)
古墳	19(25)	78 (81)				
奈良	23(43)					
平安	115(221)			1(20)		
中世	3(3)	8(8)	11(11)			
不明	39(44)	24(49)	約890 (約 1,220)	17(22)	14(17)	2(3)

主な出土遺物

土器・陶器：縄文土器，土師器，黒色土器，須
恵器，灰釉陶器等

鉄製品：鎌，鋤頭，紡錘車，ノミ，刀子等

石製品：石臼，砥石等

その他：ホドイモ等

はじめに 本年度は，前年度の調査を引き継ぎ，残されたほぼ6割の面積を対象として発掘調査が行われた。その結果，発掘区の全域にわたって遺構が密に分布すること，それらは占地場所を変えながら古墳時代終末期から平安時代の後半期に至るまで継続的に営まれていることが確認された。現在，本格的な整理作業が開始されたばかりで，個々の遺物の観察や遺構相互の関係の解明などは今後に待たねばならないが，既に得られている所見をもとに，前年度も含めて時代別の概要を述べてみたい。

縄文時代 奈良・平安時代の遺構の検出面よりさらに下位面において，数か所の焼土址とその周辺に中期・後期の土器片数点が検出されている。付近を精査したが，居住域とは積極的に認め難い。

古墳時代終末期 7世紀の中頃には，発掘区のほぼ中央付近にまとまった居住域が形成される。5間×3間等かなり大形の掘立柱建物址と竪穴住居址とが強い方位規制のもとに整然と配置される状況を呈している。この地区の南北両側には，ほぼ同時期に属する竪穴住居址が分布するが，距離を置いて散在する傾向を示す点や配置規制が弱いと思われる点などから，中央付近の様相とは異質なものと考えられる。

奈良時代 前代から継続的に発展する。中央部は依然として遺構数が卓越し，大形の竪穴住居址も出現する。『美濃国』刻印のある須恵器杯蓋（口絵4の上）を出土した竪穴住居址もこの地区である。さらに，南北両側の地区にも竪穴住居址がその数を増して分布するようになる。それらの多くには掘立柱建物址がともなうことも判明している。

平安時代前半 遺構の占地場所が大きく変動する時期である。前代までに拠点をなした中央付近が居住域でなくなり，その両側に飛躍的に遺構数が増大する。特に，北栗遺跡との境をな



第13図 松本市南栗遺跡550号住居址出土土器一括品

す堀川に近い北地区や遺跡南部の最も標高の高いところに堅穴住居址の重複が著しく、居住域の中心であったことが窺われる。また、建物の軸方位がほぼ南北を向くこと、小規模な堅穴住居址の存在がかなり目立つこと、カマドの基本形態を異にする堅穴住居址が興味深

い分布を示すことなどから、新たな要因が形成されてきていることも推測される。

灰釉陶器の出現後には、再び占地場所が変動する。南側では遺構の分布はほとんど見られなくなり、北側の堀川付近に前代に続いて集落が営まれる。堅穴住居址の特徴をみると、小規模住居のあり方などに大きな変化はないが、平均的な床面積はやや減少する傾向にある。しかしながら、数軒ではあるが礎石をもつ住居が出現することは注目される。

平安時代後半 北側では遺構の分布が希薄になり、南側で再度大きく展開する。堅穴住居址のプランは不整形のものが数多く出現し、床・壁の状況からも前代までの堅牢さが見られなくなる。また、八稜鏡と灰釉陶器のセット等を副葬した墓址なども散見される。

中世以降 内耳土器を出土する土壌、集石をともなう土壌などが、発掘区の南側の地区に散在する。掘方の覆土や形状・規模が前代までのものと明らかに異なる掘立柱建物址の内には、この時期のものが数棟存在するであろう。

まとめと今後の課題 現在、個々の遺構の構造上の特徴に関する情報等が徐々に整備されつつある段階にあり、遺物を含めた詳細な検討は今後に待たねばならないが、先述した時期別概要の中から浮かび上がってきた課題について述べてみたい。

古墳時代から奈良時代にかけて、45棟の掘立柱建物址と41軒の堅穴住居址が集中する地区は本遺跡を特徴づけるものである。それらがかなり強い方位規制のもとに配置される景観は、周辺地区との比較においてかなり異質であり、その性格をどう考えるのが課題となる。そして、このように異なった景観を示す地区が有機的にどうつながって集落を構成するのか、それを当時の社会的動向との関わりでどう理解すべきかなど課題は大きい。また、これだけの大規模集落が大きく占地場所を変えることの要因も様々の角度から考察されねばならない。それらの課題を、周辺遺跡を視野に入れて、自然環境や生産域の問題などから、多角的に分析することが重要と思われる。

(小林俊一)

所在地：松本市大字島立鍵田4,274-1他

調査期間：昭和61年4月7日～同年10月2日

調査面積：38,140㎡ (54,320㎡)

立地：鎖川および梓川により形成された扇状地扇端部

時代と時期：縄文時代中・後期，古墳時代，奈良時代，平安時代，中・近世

遺跡の特徴：古墳時代，奈良時代，平安時代，中世の集落，中・近世の墓域・生産域

主な検出遺構

遺構時期	竪穴住居	掘立柱建物	土壇	溝	櫛列	火葬墓	その他	
縄文			6(6)					
弥生	(1)							
古墳	4(4)		約350 (450)	3(4)	3			
奈良	31(34)	7(8)						
平安	171 (198)	21(25)						水田址1 土壇墓8
中世以降		23(28)	約900 (920)	52(59)	8	11(17)	水田址3 土壇墓2	
時期不明	9(15)	32(35)	約600 (620)	16(19)	4			

() 総計

はじめに 前年度調査のボックスカルバード部分を除く全域の調査を終了した。前年度まで明らかになった古代～中世の集落がどのような広がりを持ち、時期別に遍遷していくのか、また島立条里的遺構としての現条里景観の成立とどうかかわるのかに特に主眼をおきつつ調査をすすめた。整理途上であるが、以下時代別に概要を述べる。

縄文時代 調査区域の南側を中心に、中期から後期にかけての土器片、打製石斧などが散在的に見られた。奈良・平安時代の遺構掘り込み面から間層を挟んで下層より出土している。また、不整形の土壇も検出され、覆土中に焼土、炭化物もみられるが、遺物の分布は小範囲であり、土壇の性格や内容は明らかにできなかった。

古墳時代 同じく調査区域の南側の一角で、古墳時代末頃から奈良時代初頭に帰属する竪穴住居址が4軒検出されている。調査区内では、他に同時期の遺構、遺物がみられないことから、小規模な集落に限られた場所で営まれていたと考えられる。

奈良時代 調査区のほぼ全域で、竪穴住居址や掘立柱建物址等が検出されている。竪穴住居址2～3軒に掘立柱建物址が併存する遺構のまとまりが、微高地と想定される場所に散在的に分布する。その遺構のまとまりには、軸線を合わせたり、軸線が同一方向の溝がみられるなど、遺構配置におけるある種の規格性が指摘できる。竪穴住居址、掘立柱建物址ともに規模の大きいものが多く、また、同一場所での切り合いが目立つ。

平安時代前半 前代に占地した場所に、引き続いて遺構が構築されている。数軒の竪穴住居



第14図 松本市北栗遺跡87号住居址遺物出土状態)

は礫による住居址周壁の破壊や覆土遺物の砂礫混入例があり、境沢の流路変化などが考えられる。さらに、時期が下るにしたがって、住居址等の小形化、規格性の希薄化、掘立柱建物址の減少などが指摘できそうである。

平安時代後半 調査区内ほぼ全域で継続して営まれてきた遺構が、調査区の南側の限られた範囲にのみ構築されたのは、大きな変化である。竪穴住居址のプランが方形からやや不整形になったり、軸線のばらつきが大きくなることなども注目される点である。

中世遺構 中世から近世にかけての遺構が、調査区の中央で多数検出されているが、平安時代との関係はまだ、明確になっていない。該期の遺構は大きく3段階に区分される。まず、長辺5～6m、短辺3m程のいわゆる竪穴状遺構が構築される段階がある。床面などは竪穴住居址に類似するが、カマドは築かれず、床面中央に火床が検出された例もある。次の段階では、東西・南北に方向を合わせた溝と、それに区画された内側に掘立柱建物址が建てられる。掘立柱建物址はいわゆる竪穴状遺構を伴う例が多い。その後これら遺構を切って、火葬墓などの墓塚を含む土壙群がつくられる。このように大きく3段階でとらえられるが、各遺構の帰属時期が明確にならないものが多く、それぞれの時期が継続するかなどを含め、整理検討の途中である。

島立条里（現条里景観）と中世遺構との関係も注目される点であろう。方区画してくる溝や掘立柱建物址が、現水田畦畔や用水路などの位置や方向と密接に関わってくることは、現条里景観の成立時期ともからめて注視したい点である。さらに、現水田を細区画した水田も検出されており、近世を経て現在につながる水田の変遷がとらえられそうである。

まとめと今後の課題 調査区域内では、古墳・奈良両時代に成立した集落が、平安時代・中世まで営まれ、やがてほぼ全域が現在のような生産域に変わっていくことが明らかになった。しかし、集落は刻々と変化し、移動しており、今後土地利用や自然環境、周辺諸遺跡の動向、さらに他分野の研究の成果なども関連づけながら、実態の把握と背景の解明をしていく必要がある。その中で、現条里景観の成立を含めてこの地域の歴史を継続的、重層的にとらえたい。

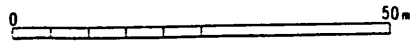
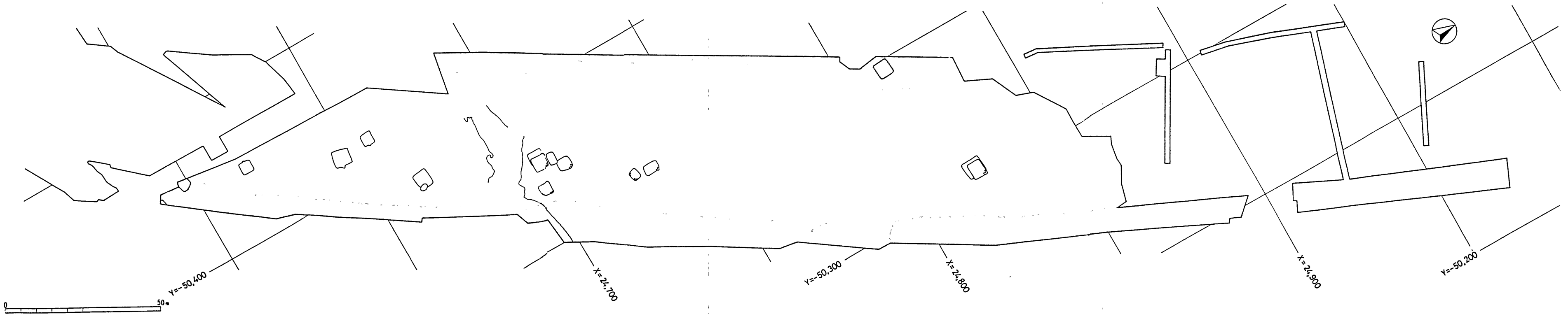
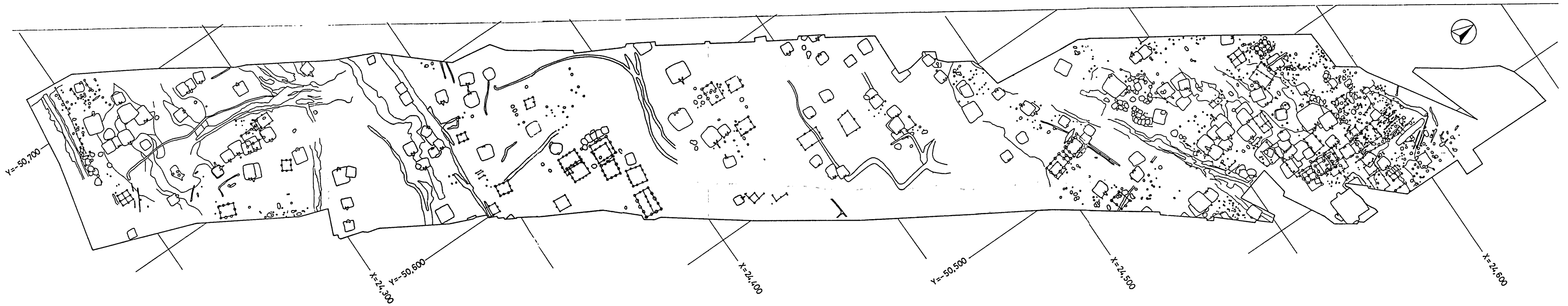
（百瀬新治）

址、掘立柱建物址が柵列や溝と結びつきながら、規格性をもって配置されている点も前代と共通する。微高地を中心として遺構が集中するのに対し、微高地間の低地部分ではほとんど遺構が検出されない。境沢寄りの遺構空白域からは、該期に営まれた可能性の高い水田址が検出されており、居住域と生産域の関係を理解するうえで遺構空白域が注目される。

境沢の南側一帯では、短期間に竪穴住居址を移動させている。この地域で



第15図 松本市北栗遺跡全体図(1:1,000)



第16図 松本市三の宮遺跡全体図 (1:1,000)

所在地：松本市大字島立字大麦田3,110-ロ他

調査期間：昭和61年4月7日～同年10月27日

調査面積：16,320㎡（総計 43,120㎡）

立地：梓川によって形成された三角州性扇状地

時代と時期：古墳時代，奈良時代，平安時代，中世，近世

遺跡の特徴：古墳時代末～中世にかけての集落，中世以降の生産域・墓域

主な検出遺構

遺構時期	竪穴住居	竪穴建物	土 壙	溝	柵 列	火葬墓	そ の 他
古 墳	6(10)		・ 1	1			
奈 良	12(18)	3(16)	8	1			
平 安	119 (148)	35(47)	約900	1	9		畠址 1
中 世		15(18)	約 1,400		1		畠址 2、集石 1 水田址 3
近 世							
不 明			約600	43(56)			集石 1

() 総計

主な出土遺物

土器・陶器：縄文土器・土師器・灰釉陶器・須恵器・中世陶器・質

易陶磁器

土製品：紡錘車・羽口

石製品：石帯・石臼・砥石

鉄製品：紡錘車・鎌・鋤先 他

青銅製品：銭貨

はじめに 本年度の調査は、前年度に発掘を終えた東・西両側道部分に挟まれた本線部分を中心に実施された。前年度の調査により得られた成果をもとに、本遺跡がもつ歴史的環境を踏まえつつ、古代～中世にわたる集落の展開や、従来より注目されてきた島立条里遺跡の性格を考古学的に把握することに主眼をおいて進めた。7ヶ月間におよぶ調査により得られた主な成果は上表に記したとおりである。以下、遺構と遺物についての概要を時代を追って述べる。

古墳時代末～奈良時代 この時期の遺構としては、一定のまとまりをもちつつ散在的に分布する竪穴住居址や建物址などの存在が明らかとなった。遺跡全体の中では調査遺構数はごくわずかなものにとどまってはいるものの、大型建物址群と竪穴住居址群の有機的な関連が認められる地点が検出されており、本遺跡成立時期の状況、ひいてはその社会的背景を探る上での貴重な資料となることが予測される。

平安時代 該期になると、前代において看取された各種遺構の分布状況は一変し、竪穴住居址をはじめとした遺構数は飛躍的に増加している。それら居住の場は前代までには顧みられることのなかった地点に移り、河川堆積物に由来する微高地を、選択的に居住域として占地するようになる。この時期の遺構は、自然流路や溝によって区画された内部に東西・南北方向を強く意識して構築されており、当該期にあっては集落景観を律するような規則が社会内部に存在したことを窺わせている。また、出土遺物のあり方により、この時期は大きく前半と後半に区分することが可能であるとともに、遺構間の切り合い関係から、それぞれに数段階の変遷も考えられている。こうした各遺構の時期決定やより細部にわたる変遷過程の解明、さらにはその作業により導かれるであろう同時存在の遺構群に対する多角的な検討・評価が今後の課題とし



第17図 松本市三の宮遺跡の礎石ある大型竪穴住居址



第18図 松本市三の宮遺跡出土の女性像線刻画
ある須恵器杯 (1:1.5)

氾濫といった自然的要因が深く関わっていたことが調査時より注意されてきているが、それを契機として集落のあり方そのものにも前代とは大きく異なる点が多々認められるようであり、開発集落の解体といった時代的・社会的要因も関与していたことも考えられている。

また、該期の遺構の中で特に注目されるのは、1000基以上の土壙群の存在であろう。出土遺物等から鎌倉時代～室町時代前期にかけての墓壙群として捉えられるが、その形態や主軸方位などからの分類作業を通して、この墓域を形成した人々の実像に迫ることも可能のように思われる。この他、近世に含まれる土壙もいくつかあるが、十分な分析には立ち至っていない。

まとめと今後の課題 以上、時代を追って、本遺跡の概要と注目される遺構・遺物について若干その説明を加えてきた。そこでは、各時代それぞれに特徴的な遺構・遺物の内容を有し、その時々時代の性を如実に反映していることが理解された。現段階ではそれらを統一的に掌握するための視点を示しえないが、今回は先述した調査時点での重要な課題の解明につながる貴重な資料の蓄積をなした点を評価するとともに、残された多くの諸問題については今後の整理作業の進展の中で明らかにしたい。

て残されていると言える。

個々の遺構と遺物について、若干触れるならば、礎石をもつ大型竪穴住居址の存在や線刻画の描かれた須恵器片の出土は特筆されるものであった。前者は東西7m、南北8.3mの規模をなし、壁の一部に張り出し部をもつという他址にはない構造を有している(第17図)。礎石はカマド石の転用による扁平な花崗岩の大

礫を用いて、ほぼ1.8m間隔で並べられており、礎石間の一部には「地覆木」を置いたと思われる浅い溝状の遺構と木質残片も観察された。出土した遺物より9世紀後半期の所産と考えられている。後者の線刻ある須恵器片(口絵3の上、第18図)は、9世紀前半期と比定される須恵器杯の内側底面に、女性裸像を焼成前に描いたものであり、県下はもとより全国的にも極めて珍しく、その性格が注目される場所である。

平安時代末～中世 平安時代もその末頃になると住居址の数は激減し、居住域としての占地のみならず、住居址の構造にも大きな変化が生じている。こうした変容の背景には自然流路の

(百瀬忠幸・北原正治・宇賀神誠司)

所在地：松本市大字島内字屋敷5659他

調査期間：昭和61年9月11日～同年12月3日

調査面積：11,865㎡

遺跡の立地：旧梓川によって形成された中州性微高地上

時代と時期：中世後半，近世

遺跡の特徴：中世の墓域・生産域，近世の居住域

主な検出遺構

遺構 時期	掘立柱 建物址	土 塋	溝	櫛列	火葬墓	その他
中世		約100	1		7	石棺状遺構1 水田址
近世	1	約70		1		

主な検出遺物

土器・陶磁器：内耳土器・中近世陶磁器

鉄製品：刀子・釘

青銅製品：銭貨・^{かんざし}簪・刀金具

石製品：砥石・凹石　その他：漆器・人骨

はじめに 本遺跡は、島内遺跡群の中央部に位置し、梓川東岸の氾濫原中に立地する。主な遺構は、旧梓川の支流によって中州状に開析された微高地に集中するが、その間に南西から流れ込む自然流の跡も確認でき、遺構の形成過程を考える際の資料となった。

予定の調査面積のうち、大日堂部分は堂宇の移転ができず次年度へもちこむこととなった。中世後半 遺構が特に集中するのは、調査区南端の大日堂周辺で、大日堂南側には1辺3～4mの比較的規模の大きな方形の土塋(以下「大型土塋」とする。)や火葬墓等が密集し、大日堂西側にも小規模の土塋群が存在する。

南側の遺構群では、覆土中に灰・炭屑や焼土粒を伴う例が目立ち、人骨と思しき骨片や副葬の可能性もある銭貨が多出した。状況から墓域と考えるのが妥当であろう。遺物として他に内耳土器や陶磁器、刀子または釘らしき鉄器、砥石や円礫の両側からくぼみを入れた石製品を伴う。陶磁器のあり方から遺構構築時期は中世後半から末頃と考えている。土塋の規模・形態には多様性があるが、切り合いが少ないことから時期差以外の解釈も必要となろう。配置については、大型土塋が切り合わずにはぼ方形に並ぶ状況が認められる。遺構構築上の特徴としては、基盤の礫層を掘りぬく深いものと掘りぬかない浅いものがあり、前者の覆土中には礫が目立つ。特別な例として、大型土塋の中で掘方の内側に石積み囲いをもつ例(第19図)がある。

大日堂西側からは、土塋群が2か所検出され、南半の土塋群の1つから銅製の簪が発見されている。また、東側には、内のり150×25×20cmの石棺状遺構(第20図)が単独で発見された。扁平な楕円礫を底面に並べて敷きつめ、また四面に立てて巡らす。その上面に同様な礫を蓋石のように覆う様は、「石棺状」と呼ぶべき形態をとる。遺物が皆無のため時期判断は難しいが、類例を集め検討中である。



第19図 松本市北中遺跡の囲い石ある遺構



第20図 松本市北中遺跡の石棺状遺構

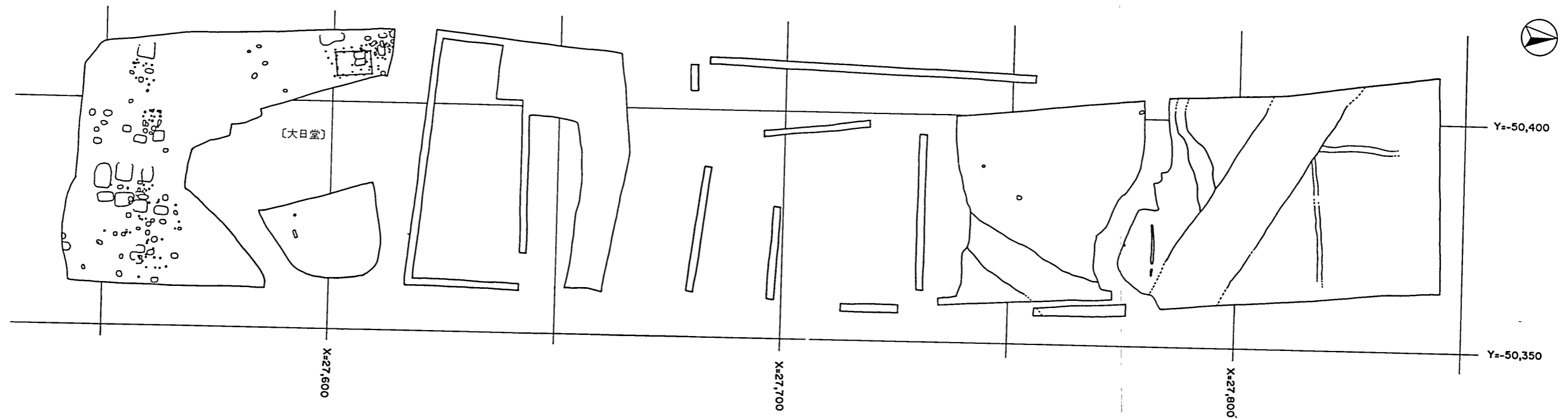
本遺跡で南端に次いで遺構が認められるのは、北側3分の1の部分である。火葬墓も2基検出されたが、溝址や水田址等大日堂周辺と比べると性格の異なる遺構が広がる。水田址は、溶脱層と鉄・マンガンの集積層が互層をなし、それが何枚か認められること、鉄・マンガンの集積の薄い部分が区画するかのようにL字状に巡っており、これが畦畔と考えられることなどから認定した。プラント・オパール

の分析結果を待ちたい。現時点では、溝址と畦畔とが方向を同一にする点と、土層の特徴が北方遺跡の中世層と共通する点を指摘しておく。

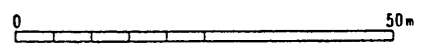
近世 大日堂西側北半の土壌群は、南半より1層上面から掘り込まれており、掘立柱建物址や柵列は、それを切っていることから、大日堂南側の大半の遺構より新しい時期の所産と考えたい。調査区西縁にかかる不整形な土壌より完形の燈明皿や仏具と考えられる陶磁器がまとめて出土したが、その内最も新しい陶磁器は、近世末頃のものである点も考慮した。一方、大日堂南側の遺構中にも掘立柱建物址等の柱穴と規模・覆土の特徴を同じくするピットが見られる。従って西側と同時期に遺構が存在した可能性を否定することはできない。

遺跡北半の旧水田跡を切るように北西から流入してきた自然流路は、近世段階で堆積したと考えられる土層を2時期に亘って深く切り込んでいる。北半の一带に居住域が認められないのは、旧梓川の影響を受けやすい部分であったからとも理解できる。

まとめと今後の課題 南北の遺構集中区に対して、中央部分の先行トレンチには、何本もの自然流路の断面が認められ、中世遺構が掘り込むべき層の上面には凹凸が多く見られた。一方、大日堂や北半の火葬墓周辺では相対的に基盤の礫層が高い。このことから遺跡中央部分は、中世遺構構築期にあっては不安定な場所であったことが類推され、わずかに高い部分を求めて墓域が形成されたと推定する。中でも南端に墓址と考えられる土壌が他より多く集中するのは、単に安定していたからだけでなく、引き続き大日堂という建物が立つべき特定の場所であったと考えることもできる。次年度大日堂下を調査する際の課題としたい。 (竹内 稔)



第21図 松本市北中(上)・北方(下)遺跡全体図 (1:1,000)



所在地：松本市大字島内字釜海渡6792他

調査期間：昭和61年7月7日～同年11月21日

調査面積：17,230㎡

遺跡の立地：旧梓川によって形成された中州性微高地上

時代と時期：平安時代中頃・後半，中世初頭・中世

遺跡の特徴：平安時代の集落

主な検出遺構

遺構 時期	堅穴 住居 址	掘立 柱建 物址	土 壇	溝	柵 列	火 葬 墓	そ の 他
平安	31	2	626	1			水田址(?)1
中世	1	8		5	2	9	堅穴状遺構6 水田址1

主な検出遺物

土器・陶磁器：土師器・須恵器・灰釉陶器・白磁
鉄製品：刀子・犁・鎌

青銅製品：銭貨

石製品・土製品：砥石・土錘

その他：漆器・人骨

本遺跡は梓川が形成した扇状地のほぼ扇端部に位置し，付近は水田の広がる農村地帯で，都市化も進んでいる。南北360mにわたる発掘調査の結果，原地形は南から北へ緩く傾斜し，その北半の多くはいずれも南西—北東という一定した方向性をもっている礫層に覆われていることがわかり，かつての梓川の網状流が形成したものであることが考えられた。

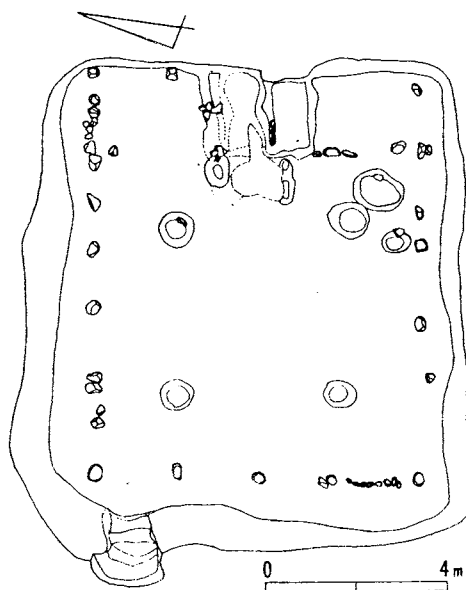
比較的礫層の少ない調査区南半からは，当初予想していた以上の遺構が検出された。検出された主な遺構は，堅穴住居址・掘立柱建物址・土壇・火葬墓・溝・柵列などで，平安時代から中世にかけてのものである。このうち，堅穴住居址は方形・長方形のプランを呈し，1辺3～4m程度の規模のものが大半で，多くは石組みのカマドをもち，その主軸方向は東または西を向くものがほとんどであることがわかった。

掘立柱建物址は，総柱建物址2棟を含む10棟が検出された。規模は，総柱で2間×2間が2棟，その他の建物址は1間×1間が3棟，1間×2間，2間×3間，3間×7間がそれぞれ1棟，不明が2棟である。このうち，3間×7間の建物址は南北棟で，西側には出入口部を思わせる張り出し部をもっていて興味深い。

土壇・火葬墓は調査区南部に集中し，とくに火葬墓はすべて中世に属するもので，その一帯が墓域であったことが理解される。

このほか，調査区北端部からは水田址としての可能性のある遺構が検出されたが，これは平安時代集落の生産域を検討する上でひとつの重要な資料であると言える。

こうした遺構のなかで，15号住居址(第22図)は，他の住居址とは大きく異なる規模と構造を有した堅穴住居址として特筆すべき存在である。南北約8m，東西約10mのプランをもち，壁際にはほぼ等間隔の礎石が配され，住居址中央部には4本の支柱穴がほぼ方形に穿たれている。カマドは屋内に張り出した形をとる石組みカマドで，石を配した煙道部をしたがえている。ま

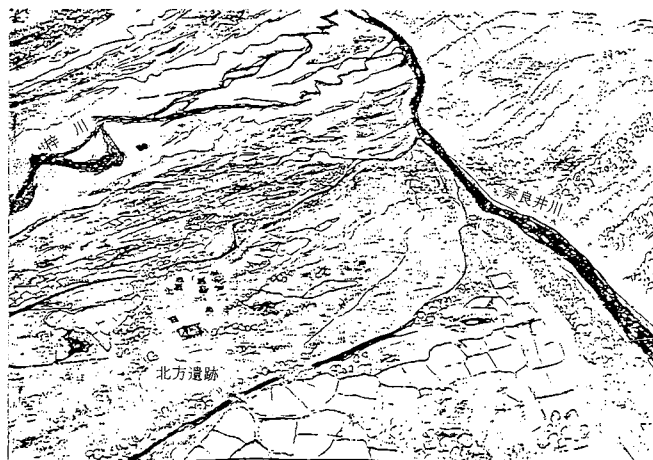


第22図 松本市北方遺跡の礎石のある大型堅穴住居址

では、南北に連続した3列の住居址群が認められ、カマドの位置にも統一性が見られた。このことから一帯には「道」あるいは「地割り」といった何らかの規制が働いていたことが想定できよう。また、北群西半からは屋外カマドと思われる遺構が検出されているが、その存在を裏付けるかの如く、カマドがない、あるいはあっても脆弱なものしかもたない住居址が、その遺構を取り囲むようにして分布している。

南群は、先述の大型住居址に加えて、北群と同様な小型及び1辺4～5mの中型住居址によって構成されているが、その総数は北群より少ない。大型住居址の北側に小型住居址が数軒分布し、中型住居址は一群をなしてまとまっている。小型住居址はカマドをもたないか、あっても脆弱な施設のため、堅固なカマドがある大型住居址との関係を追究する必要がある。

集落の変遷は、遺物の検討などにより北群・南群を通じて、大型及び小型住居址→中型住居



第23図 松本市北方遺跡の想定復元図

址という流れを読み取ることができた。このなかで、大型住居址の役割や、大型住居址と小型住居址との関係については、今後の検討課題の枢軸をなすものである。さらに、大型住居址出現以前及び中世以降の集落のあり方に関しては、隣接する松本市教育委員会調査分をはじめとした周辺遺跡との総合的な考察のもとに分析を進めていきたい。

(豊田伸一)

(8) 上手木戸遺跡

—第24図—

所在地：南安曇郡豊科町大字高家
字中曽根3917他

調査期間：昭和61年8月4日～同年9月10日

調査面積：2,000㎡

遺跡の立地：旧中曽根川が形成した段丘縁部

時代と時期：中世後半・近世

遺跡の特徴：中・近世の居住域，生産域

主な検出遺構

遺構 時期	竪穴 居住址	掘立 建物址	土 塙	溝	そ の 他
中 世	3		約140	1	
近 世		1	約100	2	畠址 1

主な検出遺物

土器・陶磁器：内耳土器・中近世陶磁器

鉄製品：釘 他 青銅製品：銭貨

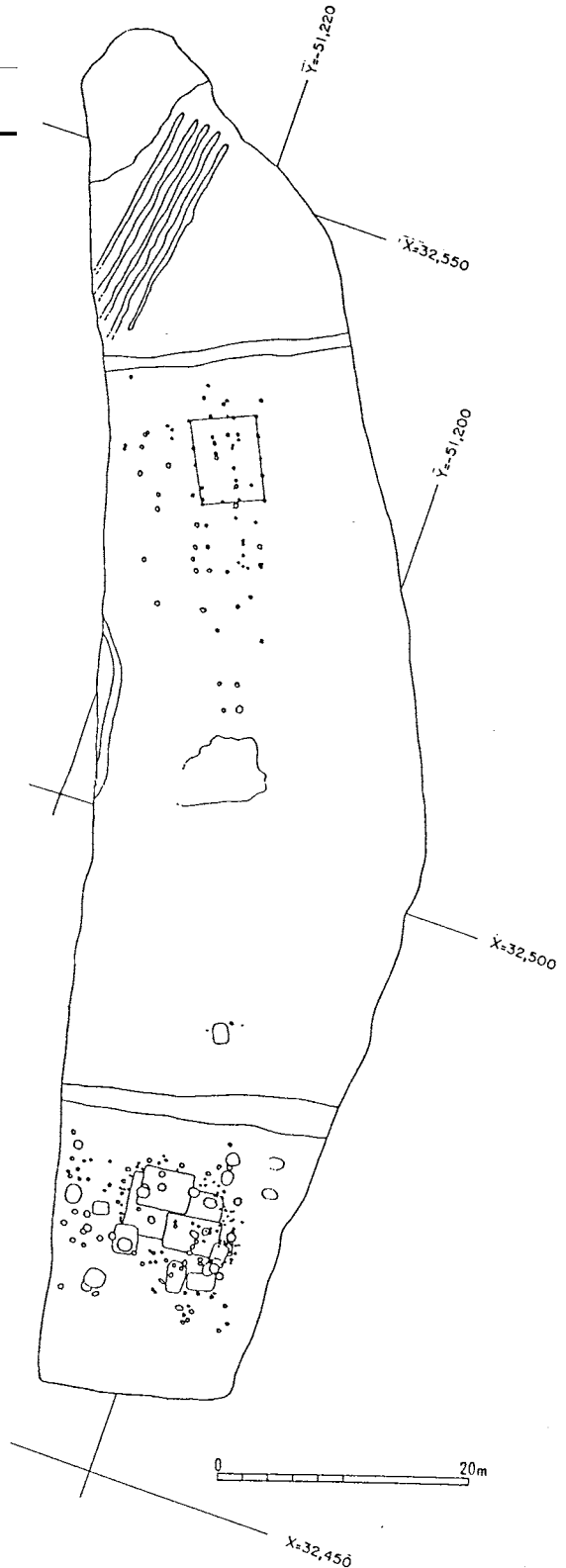
石製品：砥石・凹石

はじめに 本遺跡の本年度調査範囲は、一般に中曽根元町面と称される段丘の東縁部に位置する。崖下には旧中曽根川により削られた二本木面が広がり、西方には段丘縁より低い水田地帯が南北にのびる。ともに梓川の支流が入り込んで開析した地形である。遺跡を含み現在も見られる中曽根の集落は、2支流の中に残された中州状の微高地に占地するといつてよい。

昨年度の範囲確認調査(当センター「年報2」P50参照)によって、遺跡の北方には遺構の存在は認められないことがわかり、本年度は、現集落寄りの段丘縁に絞って全面調査を行った。

調査の結果、2か所に分かれる中・近世の居住域と畠址と見られる生産域、それらを区切るような溝址が確認された(第24図)。

中世後半 調査区の南端では、ほぼ同地点で切り合う3軒の竪穴居住址と土塙群が見つかった。竪穴居住址はいわゆる竪穴状遺構とい



第24図 南安曇郡豊科町上手木戸遺跡全体図(1:600)

うべき構造のようで、竪穴の周囲には多数の柱穴が認められた。また、その周囲や竪穴内には、径1 m内外の土壌が点在し、住居址廃絶後にも何らかの遺構が掘り込まれた様子がうかがえる。伴出遺物は内耳土器が大半を占めるが、わずかにかわらけや陶磁器・北宋銭もある。遺構群の北側には竪穴の東西辺とほぼ平行する溝が走る。溝の下層にも内耳土器が入ることから、竪穴住居址と近い時期の溝址と考える。

近世 同様な関係は北半でも認められた。北側の居住域では掘立柱建物址であり、南より1層上面から掘り込む点が異なるが、梁に沿う方向で溝址が走る点は類似する。その溝址の北には5本の畝間と思しき溝が平行して検出され畝址と考えた。1本の畝間より寛永通寛が出ていることから近世の所産と考えてよいだろう。掘り込み面・覆土は掘立柱建物址に近い。

まとめと今後の課題 遺構の概要は以上であるが、遺跡の中心はより南西の安定した地域にあると考えられる。今後の整理の中で遺跡周辺の状態も加味しながら考察を進めてゆきたい。

(竹内 稔)

(9) ^{みなみなか}南中遺跡

所在地：松本市大字島内字広田5130他

調査期間：昭和61年6月4日・5日

調査面積：2,300㎡（総計13,800㎡）

遺跡の立地：旧梓川によって形成された氾濫原上

時代と時期：平安時代、中世

検出遺構・遺物：なし（遺物散布地）

はじめに 前年度、用地未買収のため調査が実施できなかった、国道147号線と国鉄大糸線に挟まれる2,300㎡の範囲が今年度の調査対象地区である。幅2 mのトレンチを合計5本延105mにわたって設定し、遺構の有無と土層状況の確認をするために調査を実施した。

結果 基盤となる砂礫層まで掘り抜き調査をしたが、遺構・遺物ともに検出されなかった。昨年度の調査で確認された土層ともつけあわせ、本遺跡が立地する地形を復元してみると、旧梓川によって堆積された砂礫層を、一度退いていた河川が再び流路を戻して溝状に侵食し、その後再び流路が退き、河川内では安定した土地となっていくが、その後幾回か泥流の押し出しによる堆積が繰り返され現地形が形成された。従って本遺跡の立地する地域は非常に不安定な土地であり、洪水等の自然災害を受け易く、人々が集落を形成し得なかったと判断する。本地域が開発に供されるのは、治水が行われ安定して来てからのことと思われる、その時期は近世以降と考える。以上の結果から、中央道本線内に遺構の存在はなく、遺物散布地としてとらえられる昨年度の調査で指摘されたように、遺跡の中心は本調査区域より西方に求めることができよう。

(青沼博之)

B 関越自動車道上越線

(1) 栗毛坂遺跡群

—第25図～27図—

所在地：佐久市大字岩村田字久保田頭107-4,107-5, 108, 大馬久保127ほか

調査期間：昭和61年10月6日～同年12月26日, 62年3月9日～3月23日

調査面積：8,956㎡

遺跡の立地：湯川右岸の河岸段丘および田切地形にはさまれた台地

時代と時期：縄文時代前期, 弥生時代中・後期, 古墳時代前・後期, 平安時代, 中世, 近世, 近代

主な検出遺構

遺構 時期	竪穴 住居址	掘立柱 建物址	土 塚	溝
平安	5	8		
中世				
不明			39	30

主な出土遺物

土 器・陶磁器：縄文時代前期土器, 弥生時代中・後期土器, 土師器, 黒色土器, 須恵器, 灰釉陶器, 内耳土器, 中・近世陶磁器

石 器：石鏃, 打製石斧, 磨製石斧, 凹石, 砥石

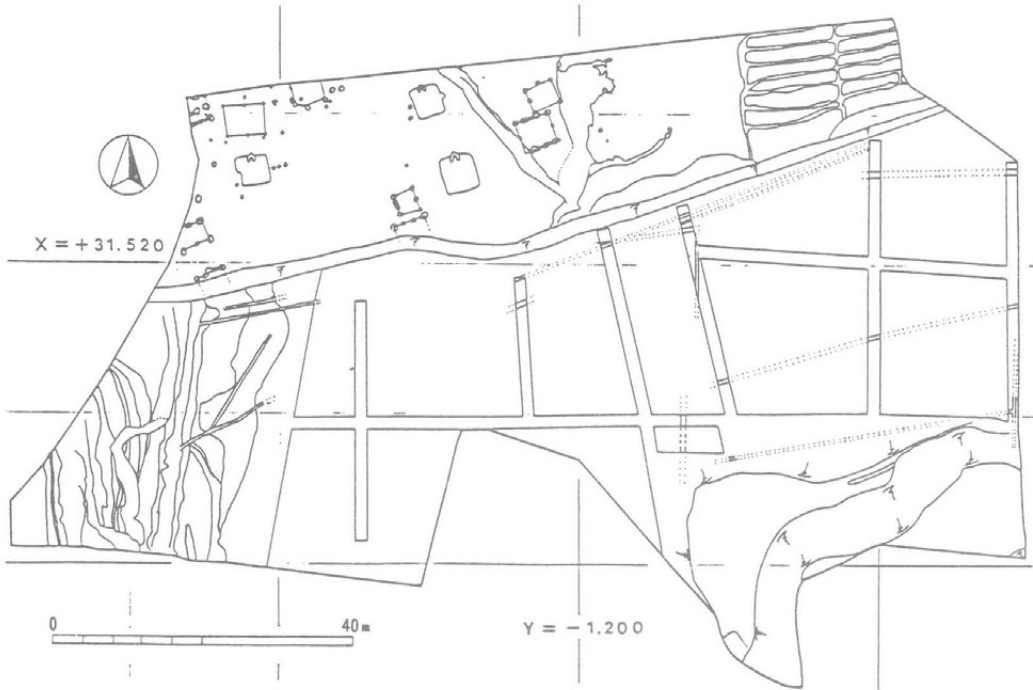
鉄製品：鎌, 鍬 青銅製品：錢貨 その他：馬の歯

今年度、面的な発掘調査を実施した地区は、「久保田頭」や「大馬久保」などの小字名が示すように、浅間山軽石流堆積による浮石火山灰層が侵食され形成された、いわゆる田切地形が発達している。検出された遺構のうち竪穴住居址と掘立柱建物址を中心とする居住域は、この田切にはさまれた台地上に展開しているが、周辺一帯は過去の水田開発に伴う大規模な削平と埋め立てが行われており、遺構群の保存状態は良好ではなかった。したがって、検出面のほとんどは削平面と一致し、上部は既に消滅して遺物包含層も原状を呈していない部分が多かった。田切内は流入堆積が主で、一部泥炭化も見られるが、平安時代までさかのぼるような水田址は検出されず、近代以降の暗渠と埋め立て以前の旧水田面が確認されたにすぎない。

今回の調査は限定された範囲で実施されたため、遺跡全体を把握するような資料は十分得られなかったが、個々の遺構に関しては、構造的に次のような特性を見出すことができる。

竪穴住居址は、5軒のうち2軒が張り出し部を有し、出入口とは異なる施設や空間が考えられること、また、床面の構築方法には、壁際を残して中央部のみ掘り込んで貼床とするものと、これとは対称的に、壁際のみ掘り込んで貼床とするものが認められた。掘立柱建物址については、柱穴の掘方にいわゆる坪掘と溝もちの2形態が認められた。これらの構造的な相違が何に由来するのかは、今後の検討課題である。

溝は調査区南西部と北東部に集中して検出され、掘り込み面や混入遺物から推定すると中世以降の所産と考えられるが、近代の暗渠を除くとその帰属時期は特定しがたい。南西部は15本の溝が単独または重複して北から南へ流れているが(第26図)、溝の幅・深さ・断面形は一定していない。これに対して北東部の溝(第27図)は、南北の2本の主流に幾系もの支流が直交する



第25図 佐久市粟毛坂遺跡全体図（1：1,000）

形で流れ込み，規格性のある個々の溝が規制的に配置されている。前者には杭列を伴い明らかに用・排水路として使用されたものもあるが，自然流路も含まれている可能性もある。後者は溝の中に石や木など構築材こそないが，一定範囲に施行された暗渠排水と推定される。現在，改めて土地所有者や耕作者からの聞き取り，古地図古文献調査，土地改良など農業土木に関する資料収集を行っているが，相方とも隣接地に未検出部分を残すため，溝の性格についてはこの部分の調査が完了した時点で究明することとしたい。（臼田武正）



第26図 佐久市粟毛坂遺跡南西部溝全景



第27図 佐久市粟毛坂遺跡北東部溝全景

Ⅱ 普及・研究活動の概要

1. 現地説明会

下神遺跡・南栗遺跡・北栗遺跡・三の宮遺跡

昭和61年7月20日、午前中4遺跡合同現地説明会を行う。現地に出土品を展示し、資料を作成配布して、下神遺跡→南栗遺跡→北栗遺跡→三の宮遺跡コースと三の宮遺跡→北栗遺跡→南栗遺跡→下神遺跡コースにて実施した。見学者200名。(47頁 第29図)

北方遺跡

昭和61年10月12日、午前中松本市教育委員会と共催で現地説明会を行う。出土品を展示し資料を配布して実施した。見学者120名

2. 現地見学

5月1日	松本市開明小学校4学年	160名	南栗遺跡
6月9日	松本市開智小学校6学年	200名	下神遺跡・南栗遺跡・北栗遺跡
6月11日	県広域セミナー受講者	80名	南栗遺跡
6月13日	松本市開明小学校6学年	40名	下神遺跡
6月17日	南安曇郡堀金村公民館	20名	南栗遺跡・北栗遺跡
6月24日	県文化財保護指導員	20名	下神遺跡・南栗遺跡・三の宮遺跡
7月1日	松本盲学校児童	7名	下神遺跡
7月2日	松本市開明小学校6学年	200名	下神遺跡
7月24日	大町市教委遺跡調査団	17名	下神遺跡
7月26日	松本市二子小学校教職員	26名	下神遺跡
8月5日	信濃学園教職員	40名	北栗遺跡
9月4日	豊科町豊科南小学校6学年	170名	上手木戸遺跡
9月8日	豊科町豊科東小学校6学年	70名	上手木戸遺跡
9月11日	松本市島内小学校6学年	120名	北方遺跡
10月17日	松本市高齢者文化財指導者研修会	20名	北方遺跡

3. 展示会

昭和62年2月7日(土)・8日(日)の両日、あがたの森文化会館において「松本平を掘る－中央道長野線松本地区遺跡出土資料展－」を開催した。展示内容は以下の通りである。

第一展示室 松本地区の古代・中世

- a 調査遺跡概要 b 南栗遺跡出土資料よりみた古代の食生活
- c 下神遺跡にみる古代の住居と集落 d 北栗・三の宮遺跡にみる中世の集落
- e 北栗・三の宮遺跡出土資料にみる古代・中世の生産具
- f 文字(土器にのこされた文字と絵画) g 銭 h 装身具 i 墓と副葬品

第二展示室 埋蔵文化財調査の手順

- a 発掘調査の手順
- b 整理作業の手順
- c 保存と活用

いずれも、地図・写真パネル・復元図・遺物等を中心に構成したが、第一展示室では特に当時の生活の復元に重点をおき好評を博した。また第二展示室では、見学者に土器接合を実際に体験していただいた。あわせてスライド映写と樋口調査第一部長による「松本平調査の成果と課題」と題する講演が行われた。



第28図 松本市あがたの森文化会館の展示会風景

マス・コミ各社に大きくとり上げられ、見学者も説明にあたった調査研究員に質問を投げかけるなど、埋蔵文化財に対する県民・市民の関心の高さを窺わせた。二日間の見学者は、7日424名、8日500名、合計924名を数え、盛況のうちに終わることができた。

4. 研究会・学習会

研究・研修活動の一環として、発掘調査全般や検出遺構・出土遺物等について来所の機会をとらえて種々御指導や御助言をいただいたり、また、講師として招聘し、研究会、学習会なども42頁表のように行われた。このうち「古代集落」と「輸入陶磁器」関係についてはその概要を記した。

古代集落研究会 昭和62年3月2日(月) 埋文センター会議室

本年度調査の目的は古代集落を明らかにすることであった。昨年の3月に小笠原好彦滋賀大学教授を招き、中央道用地内の遺跡を中心として、古代集落の学習会を行ったが、その成果を踏まえ、各遺跡とも共通課題と個別テーマをもとに調査計画をたて、4月からの本調査を行った。調査の途中に再度小笠原好彦先生を招き、発掘現場において御指導いただいたり、また、各班ともに学習会をもち、集落研究係も各班間の調整や、集落研究を行うための基礎的資料の収集や分析を行ってきた。これらの調査や研究のまとめとして、所内において研究会を開くことになった。

研究会は、集落研究会より基本的方向として、まず次のように松本平におけるⅠ～Ⅴ期区分上の集落の展開の考え方を示し、その後話し合いをもった。

- | | | |
|----|------------------------|------------------|
| Ⅰ期 | 竪穴住居址が散在する状況 | 南栗遺跡では集落の継続 |
| Ⅱ期 | 小規模に集落が成立する | 南栗遺跡では掘立柱建物集落の成立 |
| | ・1～数軒の竪穴住居と掘立柱倉庫のまとまりか | 《空闲地の開発の開始》 |
| Ⅲ期 | 集落が大規模に展開する | 《開発の拡大と小集団の確立》 |
| | ・数軒の竪穴住居と倉庫のまとまりか | |

(大型住居の存在)

- | | | |
|----|----------------------------|-------------------------|
| Ⅳ期 | 集落の継続 一般集落の消滅 | 《新興有力層の成長と小集団の解体》 |
| | ・数軒の堅穴住居のまとまり, 倉庫不明 | |
| | ・大型住居(礎石をもつ)の出現と一般堅穴住居の小型化 | |
| Ⅴ期 | 規模を縮め散在的に継続 | 《開発集落の解体と有力層の離脱・集落間の格差》 |
| | ・集落規模の縮小と方向規制の弛緩 | |

上記の各期について活発な話し合いが行われ、これからの研究方向や問題点が明らかにされ、集落研究係の示した集落の展開の考え方は、各遺跡を分析する中で、大筋では問題がないことが確かめられた。更に、各遺跡ごとの展開には特徴があり、これからの方向としては各遺跡が集落の内部構造を明らかにしていかなければならないこと、そして変化のあり方を考えなければならぬことが確認された。また、現在進められていない遺物の検討、とくに生産手段の分析の重要性や個々の要素をいかに集落の研究に結びつけていくかなどについて話し合われた。その他に、自然環境の面や、文献との関連や、条里とされている地割との関連など、いくつかの角度から意見がだされた。

このように話し合いの中で出された問題点や課題は、来年度から本格的に始まる報告書の作成の中で生かしていこうということが確認された。

輸入陶磁器学習会 昭和62年3月16日(月)から18日(水) 埋文センター会議室

講師 森田 勉 (九州歴史資料館)

近年の松本平の古代末期から中世にかけての遺跡調査の中で、輸入陶磁器の出土例が増大しており、その研究の必要性が一部で指摘されてきた。そこで今回は、森田勉氏を招いて学習会を行い、輸入陶磁器の分類や、整理の方法、その歴史的な意義等について御指導をいただいた。

17日は午前中吉田川西遺跡の遺物、午後は松本市分の神戸・南栗・北栗・三の宮・北方各遺跡の遺物を観察していただき、御指導を受けた。その中で吉田川西遺跡の遺物は、古い段階のものとして越州窯青磁の碗、白磁の鉢があること、また次の段階には11世紀後半から12世紀代の白磁Ⅱ類の碗やそれに伴う皿、白磁Ⅳ・Ⅴ類の碗があり、その出土量は北部九州、幾内中心部を除けば非常に多い点を指摘された。なお、南栗遺跡には越州窯青磁の碗が、また北栗遺跡には13世紀代の青白磁の梅瓶、型づくりの白磁碗など、県内では類例のないものがあることがわかった。全体としては全国的な傾向とほとんどかわりないと指摘があった。

翌18日は森田勉氏より輸入陶磁器の研究の現状について講演をしていただいた。

この学習会の成果は、今後の調査や整理の中で生かされると思われる。また輸入陶磁器研究の重要性についても認識をもつことができた。

講師招へい及び来所による指導・講習会

期 日	講	師	研 修 内 容
61. 4. 3	奈文研 国学院大学	山中 敏史 木下 良	<input type="checkbox"/> 出土品指導
5.14~15	県農業試験場	梅村 弘	各現場で土壌分析指導・講演会
5.15~17	滋賀大学	小笠原好彦	現場視察指導・講演会
5. 19	八王子市教委 他古代・中世土器研究会メンバー10名	服部 敬史	<input type="checkbox"/> 出土土器中心に学習会
5. 20	榎原考古学研究所	石野 博信	現場視察指導
5. 20~23	宮崎大学	藤原 宏志	プラントオパール分析調査のため現場指導
5. 23	京都大学	高谷 好一, 他 3名	水田・畠址現場視察指導
"	信州大学	笹本 正浩, 他 6名	中世水田・畠址の現場見学指導
5. 29	埼玉埋文事業団	坂野 和信	現場視察, 灰釉陶器中心に指導
6. 12	長野県遺跡調査指導委員会	林 茂樹	<input type="checkbox"/> 現場視察指導
6. 20	追手門大学	金田 章裕	糸里制中心の現場視察指導
8. 13	(財)大阪文化財協会	坪井 清足	集落址・糸里制調査指導
8. 18	奈良大学	泉 拓良	縄文関係指導
8. 22	長野県遺跡調査指導委員会	戸沢 充則 他 4名	現場視察指導
8. 24	奈文研	田中 琢	「発掘調査報告書の作成について」講演会
8. 30	奈良大学	水野 正好	墨書土器等の指導
9. 18	横須賀人文博物館	大塚 真弘	各現場視察指導
9. 20	宮崎大学	藤原 宏志	プラントオパール分析調査・指導
10. 20	信濃史学会	小穴 芳実	島立地区各現場視察指導
11. 1	日本考古学協会	久永 春男, 他 3名	縄文土器等見学指導
11. 10	愛知県埋文センター	丹波 博 池本 正明	<input type="checkbox"/> 吉田川西遺物を中心に見学指導
11. 17	三重県文化課	山田 猛, 他 3名	押型文土器の見学指導
11. 21	群馬県埋文事業団	原 雅信, 他 3名	出土品見学指導
11. 22	国学院大学	小林 達雄, 他 2名	出土品見学指導
11. 25	国分寺市教委	広瀬 昭弘	押型文土器見学指導
12. 18	長野県史刊行会	笹沢 浩	弥生〜古墳時代土器見学指導
12. 25	長野県遺跡調査指導委員会	林 茂樹 森島 稔	<input type="checkbox"/> 佐久地区調査状況視察指導
62. 1. 23	奈良大学	水野 正好	人物画像須恵器・墨書土器等につき指導
1. 30	長野県遺跡調査指導委員会	森島 稔	中島B出土石器見学指導
2. 3	長野県遺跡調査指導委員会	戸沢 充則 他 4名	<input type="checkbox"/> 長野市壺崎地区付近視察, 低湿地遺跡調査法など指導助言
2. 5	房総風土記の丘資料館	折原 繁 深沢 克友	<input type="checkbox"/> 縄文中期土器中心に見学指導
2. 17	文化庁	佐藤 信	各遺跡成果につき指導助言
2. 24	京都市埋文研究所 明治大学	田辺 昭三 戸沢 充則	<input type="checkbox"/> 出土遺構・遺物につき指導助言
2. 25	奈文研	宮本長二郎	集落及び特に大型住居址について指導
3.16~18	九州歴史資料館	森田 勉	輸入陶磁器の指導
3. 19	明治大学 国学院大学	戸沢 充則・小林 三郎 吉田 恵二	<input type="checkbox"/> 調査全般につき指導助言
3. 20	奈良国立博物館	井口 喜晴	八花鏡見学指導
3. 25	奈文研	山中 敏史	集落址指導

このほか、塩尻市（小林康男、鳥羽嘉彦）、松本市（神沢昌二郎、直井雅尚、熊谷康治、高桑俊雄、関沢総）の関係者から特別の御指導、御配慮をいただいた。

5. 刊行物

『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書1』（岡谷市）

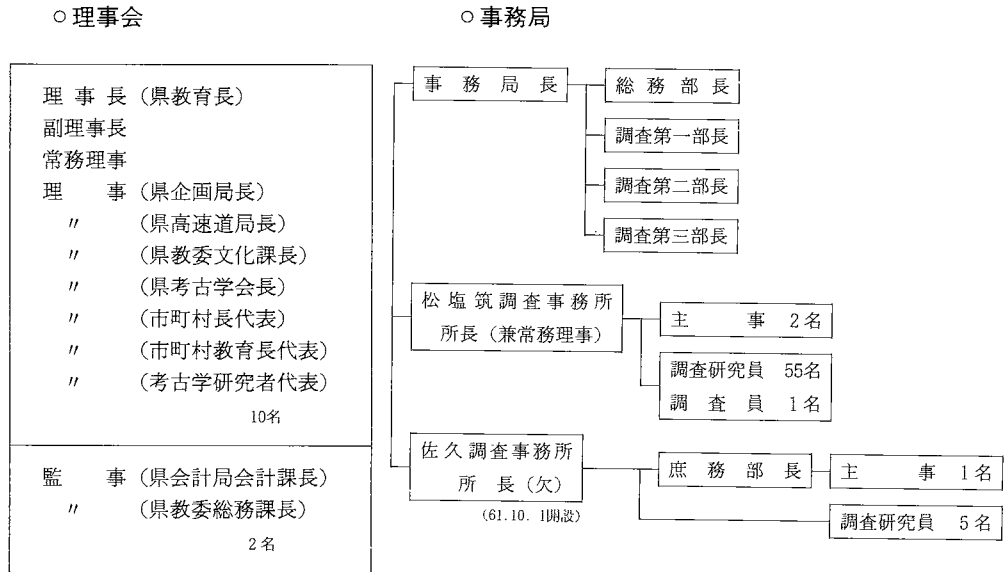
『長野県埋蔵文化財センター年報 3』（1986年度）

『長野県埋蔵文化財ニュース』No.17~20（4冊）

Ⅲ 機構・事業の概要

1 機構

(1) 組織



(2) 事務所所在地

本 部 長野市大字南長野字幅下692の2 長野県教育委員会 文化課内
 松塩筑調査事務所 塩尻市大字広丘高出字西原1977番地
 佐久調査事務所 佐久市大字安原字蛇塚1367番地 (61年10月1日開設)

2 事業

(1) 理事会及び会計監査

理事会

- 第9回理事会 昭和61年3月20日 会場 長野市 長野国際会館
 - 第1号議案 昭和61年度事業計画書(案)について
 - 第2号議案 昭和61年度収支予算書(案)について
 - 第3号議案 昭和60年度収支補正予算書(案)について
 - 第4号議案 監事の委嘱について
- 第10回理事会 昭和61年5月23日 会場 長野市 長野国際会館
 - 第1号議案 昭和60年度事業報告書について
 - 第2号議案 昭和60年度決算報告書について
- 第11回理事会 昭和61年9月18日 会場 長野市 長野国際会館
 - 第1号議案 昭和61年度関越自動車道上越線事業計画書(案)について

第2号議案 昭和61年度関越自動車道上越線収支予算書(案)について

第3号議案 寄附行為の一部変更について

○書面による理事会 昭和61年11月1日

監事の委嘱について

会計監査

昭和61年5月12日実施 昭和60年度事業計画書及び収支予算書について

(2) 調査事業 (中央自動車道長野線及び関越自動車道上越線に係る埋蔵文化財発掘調査—長野県教育委員会からの委託)

1) 調査遺跡及び面積

塩尻市・松本市・豊科町地域内10遺跡, 126,840㎡ (5頁参照)

佐久市地域内1遺跡, 8,956㎡

2) 整理作業 岡谷市大久保B遺跡ほか30遺跡について実施

(3) 事業費(昭和61年度)

中央自動車道長野線 752,900千円 (人件費329,280, 物件費423,620)

関越自動車道上越線 44,301千円 (人件費14,029, 物件費30,272)

(4) 普及活動 (39頁参照)

(5) 職員研修

1) 講師招へい及び来所による指導・講習会等 (40~42頁「研究会・学習会」参照)

2) 奈良国立文化財研究所埋文センター関係

期 日	日 数	課 程	参 加 者
61. 4.17 ~ 23	7	縄文施紋法調査	平 林 彰
5. 7 ~ 23	17	金属保存	小 林 上
6. 5 ~ 24	20	遺跡保存整備	和 田 文 人
7. 2 ~ 8. 9	40	一般研修	斉 藤 正 善
9. 4 ~ 30	27	遺跡測量	井 上 城 典
10.13 ~ 16	4	遺物取り上げ法	宇 賀 神 誠 司
10.24 ~ 11.18	25	遺構探査・予備調査	綿 田 弘 実
11.27 ~ 12.19	23	歴史時代遺跡調査	寺 島 俊 郎
62. 1.13 ~ 2. 6	25	環境考古	寺 内 隆 夫
2. 7 ~ 3. 3	15	埋蔵文化財情報	近 藤 尚 義
3. 9 ~ 10	2	保存科学研究集会	小 林 上
3.13 ~ 24	12	石器調査	望 月 映
開催 12回 参加者12名 延日数 217日			

3) その他学会関係の研修会 研究会への参加

期 日	内 容
61.4 . 2 7	日本考古学協会総会（於東京）での研究発表 吉田川西遺跡発掘調査概要（2名）、他総会参加21名
8 . 1 ~ 5	信州大学教育学部岩石鉱物学教室実習（於北佐久郡）（1名）
10 . 4 ~ 5	シンポジウム「古代の瓦を考える一年代・生産・流通」 （於奈良市）（1名）
1 1 . 1	第3回東海埋蔵文化財研究会「欠山式土器—その後」 （於名古屋市）（1名）
1 1 . 2 3	シンポジウム「房総の先土器時代」（於千葉県）（1名）
1 2 . 7	「縄文草創期シンポジウム」（於埼玉県）（5名）
62.1 . 1 7	信濃史学会研究会で「塩尻市吉田川西遺跡」の調査概要発表 （1名）、他参加者3名
2 . 2 8 ~ 3 . 1	群馬県黒井峰遺跡現地説明会（10名）
3 . 8	シンポジウム「古代の国府」（於千葉県）（3名）
3 . 1 9 ~ 2 0	第3回条里制研究大会（於奈良市）（3名）
〔この他、長野県考古学会など学会出席 約15名〕	

4) 県外埋蔵文化財施設 遺跡等視察研修

期 日	視 察 ・ 研 修 地	参 加 者
62. 2 ~ 3	大阪・福岡以下 約40か所	役員・総務部 高橋副理事長以下 6名 調査研究員 28名
1～5名のグループにより埋文センター・博物館・資料館・研究施設・調査現場・教育委員会等、関係機関の訪問・視察を行った。		

5) 全埋文協などへの参加

期 日	会 議 名	開 催 地	参 加 者
61. 5 . 8 ~ 9	全埋文協関東・中部ブロック法人連絡協議会	大宮市	3 名
6 . 2 6 ~ 2 7	〃 法人連絡協議会	大津市	3 名
9 . 1 1 ~ 1 2	〃 関東・中部ブロック研修会	館山市	3 名
9 . 1 7	文化財保護関東ブロック臨時主管課長会議	東京都	2 名
1 0 . 2 4	全埋文協法人連絡協議会研修会	多摩市	3 名
1 1 . 1 1 ~ 1 2	関東ブロック文化財行政担当者会議	静岡県	2 名
1 2 . 1 1 ~ 1 2	関東ブロック法人研修会議	茨城県	3 名
62. 2 . 1 3 ~ 1 4	関越自動車道関係4県連絡協議会	群馬県	2 名

6) 教育センター，産業教育センター関係

期 日	学校別	分 野	講 座 名	参 加 者
教育センター				
61. 7. 8～10	高 校	社 会	社会科教育基礎	山 上 秀 樹 豊 田 伸 一 青 柳 英 利 小 口 徹 北 原 正 治 中 浜 徹 市 沢 英 利 和 田 文 人 竹 内 稔 高 野 博 長 馬 場 正 光 太 田 典 孝 小 平 和 夫
8. 4～5	"	特 活	HR運営と生徒理解	
8. 6～8	小学校	社 会	地理巡視	
8. 26～27	"	理 科	臨地講習（化石と地質）	
8. 27～28	高 校	特活進路	中・高校問題行動	
9. 4～5	中学校	理 科	臨地講習（化石と地質）	
9. 24～26	小学校	函 工	土と火の造形	
9. 30	小学校	理 科	自然の神話を探る	
10. 28～29	中学校	特 活	特別活動と生徒指導	
62. 1. 27～29	小学校	教育機器	コンピュータの教育利用基礎Ⅶ	
教育センター公開講座				
61. 6. 13	中学校	技 術	菊づくり	太 田 典 孝 中 野 亮 一 望 月 映 雄 中 浜 徹
7. 10	高 校	社 会 科 基礎教育	中・高社会科の今日的課題	
8. 7	"	地理巡検	松本盆地の地理巡検	
8. 27	"	特 活	人間形成と生徒指導	
産業教育センター				
61.6.30～7.2	小学校	社 会	教材開発基礎 2	春 日 文 彦

期 日	派 遣 先 及 び 協 力 内 容	派 遣 者	備 考
61. 5. 15	飯島町教委・針ヶ谷第1遺跡発掘整理指導	大竹 憲昭	7. 22, 10. 3
" 5. 17	塩尻市誌編纂会・編纂委員会	樋口昇一・百瀬長秀	10. 18
" 6. 7	下伊那史考古篇執筆委員会	市沢英利・小平和夫	
" 6. 9	長野県史刊行会・考古資料・通史編纂会議	樋口昇一	9. 6, 12. 13
" 6. 30	山形村，朝日村老人クラブ・講演会	青沼博之	「遺跡の発掘について」
" 7. 8	浪合村教委・治部坂遺跡発掘指導	大竹憲昭・望月 映	
" 7. 19	堀金村文化財関係委員定例学習会・講演会	百瀬新治	「遺跡の発掘について」
" 7. 20	松本市寿台公民館ふれあい学級・講演会	樋口昇一	「吉田川西遺跡の意義」
" 7. 31	山形村教委・文化財調査委員会	青沼博之	12. 11
" 8. 23	大桑村教委・大明神遺跡出土遺物整理指導	百瀬長秀	
" 9. 11	塩尻市立博物館協議会・委員会	樋口昇一	62. 3. 20
" 9. 13	穂高町教委・魏石鬼の岩屋古墳調査協力	西山克己・寺島俊郎 百瀬新治・春日雅博	
" 9. 23	三郷村教委・楡道下遺跡調査協力指導	百瀬新治	
" 10. 17	松本市中央公民館高齢者教室・講演と見学	樋口昇一	「中央道関連遺跡調査」

" 10. 21	朝日村教委・村誌編纂委員会	中島経夫・青沼博之	62. 2. 20
" 10. 31	長門町教委・鷹山遺跡分布調査指導	大竹憲昭	11. 5まで
" 11. 18	原村教委・弓振日向遺跡発掘調査協力指導	大竹憲昭・三上徹也	
" 11. 25	山形村教委・殿村遺跡報告書作成指導協力	百瀬忠幸	11. 29日まで 12. 24~26
" 11. 30	塩尻市平出考古博物館・歴史講座講演会	樋口昇一	「発掘からみた塩尻の原始・古代」
" 12. 8	上郷町教委・棚田遺跡発掘調査指導	市沢英利	
62. 1. 13	松本地方事務所・老人大学講座講演会	樋口昇一	「埋蔵文化財発掘」
" 1. 28	佐久埋文センター・出土遺物整理指導	原 明芳・市川隆之	
" 2. 24	日義村教委・マツバリ遺跡出土土器指導	寺内隆夫・野村一寿	
" 2. 27	大町市教委・文化財審議委員会	樋口昇一	
" 3. 3	檜川村 "・"・"	百瀬忠幸	
" 3. 5	松本市郷土文化財連絡協議会・講演会	百瀬新治	「島立地区の発掘調査」
" 3. 6	長野県史刊行会・考古資料編纂会	樋口昇一・百瀬新治	3. 28日
		市村勝己・三上徹也	
		寺内隆夫・野村一寿	
		平村 彰・綿田弘実	

南栗遺跡の現場にて



下神遺跡で開会の挨拶をする高橋副理事長

第29図 松本市下神～三の宮遺跡現地説明会風景

昭和61年度役員及び職員

職名	氏名							
理事長	村山 正 (県教育長)							
副理事長	高橋 弘典							
常務理事	三村 忠幸							
理事	池田宗兵衛 (県企画局長)		和合 正治 (松本市長)		林 茂樹 (考古学研究者)			
	小山 一郎 (県高速道局長)		奥村 秀雄 (市町村教育長代表・長野市教育長)					
	宮下 哲 (県教委文化課長)		森嶋 稔 (県考古学会会長) (61. 7. 15から)					
監事	関 四郎 (県会計局会計課長) (61. 11. 1から)				杉田 貞夫 (県教委総務課長)			
事務局長	西沢 宣利							
総務部長	堀内 計人							
庶務部長	畑 幹雄 (61. 11. 1から) (佐久)							
調査第一部長	樋口 昇一							
調査第二部長	丸山敏一郎							
調査第三部長	(兼) 樋口 昇一							
事務職員	(松塩筑) 藤森 幸枝 笠井 浩 (佐久) 六川 直利							
調査研究員	松	百瀬 長秀	青柳 英利	金原 正	三上 徹也	市村 勝己		
		新海 節生	豊田 伸一	綿田 弘実	望月 映	春日 雅博		
	塩	市川 隆之	斉藤 正善	野村 一寿	中野 亮一	中浜 徹		
		青沼 博之	関 全寿	中島 経夫	田川 幸生	中村 千尋		
		松田 青樹	小林 上	西牧 尚人	小松 望	高野 博正		
		唐木 孝雄	百瀬 新治	市沢 英利	岡沢 秀紀	北原 正治		
		小口 徹	福島 厚利	春日 文彦	小平 和夫	伊藤 隆之		
		小林 俊一	和田 文人	井上 城典	原 明芳	百瀬 久雄		
		筑	竹内 稔	石上 周蔵	太田 典孝	近藤 尚義	黒岩 龍也	
		大竹 憲昭	平林 彰	西山 克己	寺内 隆夫	上田 典男		
伊藤 友久	岡村 秀雄	百瀬 忠幸	河西 克造	宇賀神誠司				
佐久	二木 明	山上 秀樹	白田 武正	寺島 俊郎	馬場 長光			
	(佐久 61. 10. 1から)							
調査員	百瀬 陽三							

長野県埋蔵文化財センター年報 3 1986

発行日 昭和62年3月31日

編集発行 (財)長野県埋蔵文化財センター

〒399-07 長野県塩尻市広丘高出1977
TEL 0263-54-2150

印刷 (有)中央プリント社

